

板倉町と水辺

著者	松浦 茂樹
雑誌名	国際地域学研究
号	12
ページ	21-56
発行年	2009-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00003688/



板倉町と水辺

松 浦 茂 樹*

1. はじめに

群馬県の最東部にある板倉町は、北は渡良瀬川、東は藤岡台地・渡良瀬遊水地で栃木県と境をなし、南は利根川・合の川（利根川の旧派川）で埼玉県と接し、西側は館林市とローム層台地・沖積低地で連続している（図1）。町内には中央に板倉川、やや南側に谷田川がほぼ西から東に横断し、遊水地内で両川は合流する。町の北部は広々とした農地が広がり、群馬のウクライナと呼ばれている。ここでは近代的な耕地整備が行われ、用排水の管理システムはよく整っている。

重要な交通路としては、東部には東武日光線が縦断して板倉東洋大学前駅があり、西部には東北自動車道が走っている。板倉東洋大学前駅の西側を中心に板倉ニュータウンが開発されつつあり、その西部には板倉工業団地が完成して、旧来と全く異なる都市的土地利用が展開している。しかし今日みられるようなこの都市的整備は近年形成されたもので、広々と広がる農地も、人々の多大な努力によって、ここ百年の間に形成されてきたものである。

ところで板倉町は、平成20年（2008）8月1日、景観法による景観行政団体の認定を受け、現在、景観計画の策定に向けて鋭意、努力中である。その基本的考え方は、「水場の文化的景観」の保全である。何回も深刻な水害を味わった板倉町の低地部は「水場」と言われ、その言葉は地域住民から忌み嫌われていたが、昭和22年（1947）以降、大きな水害を受けていない。今日では、この負の遺産を逆手に取り、「水場」として形成されてきた歴史的景観を文化的景観と位置づけ、地域づくりの基本に置いたのである。そこに至るまでには、水辺の再認識を進める活発な活動があった。

本論文では、板倉町における水辺の整備過程、また今後の方向について述べていく。

2. 板倉町の歴史的な水環境

2.1 板倉沼と谷田川

明治17年（1884）に近代的測量技術によって初めて作成された第一軍管区地方迅速図（略して迅速図）で当地域をみると、町の中心部には広大な面積の板倉沼と亥の子沼、その周辺にはさらに広い湿地帯がある。また板倉沼は、館林城の台地下にある城沼とつながっている（図2、3）。この板倉沼の排水は、小さな水路で谷田川と渡良瀬川に行われていた。なお興味深いことに、板倉沼には堤

*東洋大学国際地域学部；Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

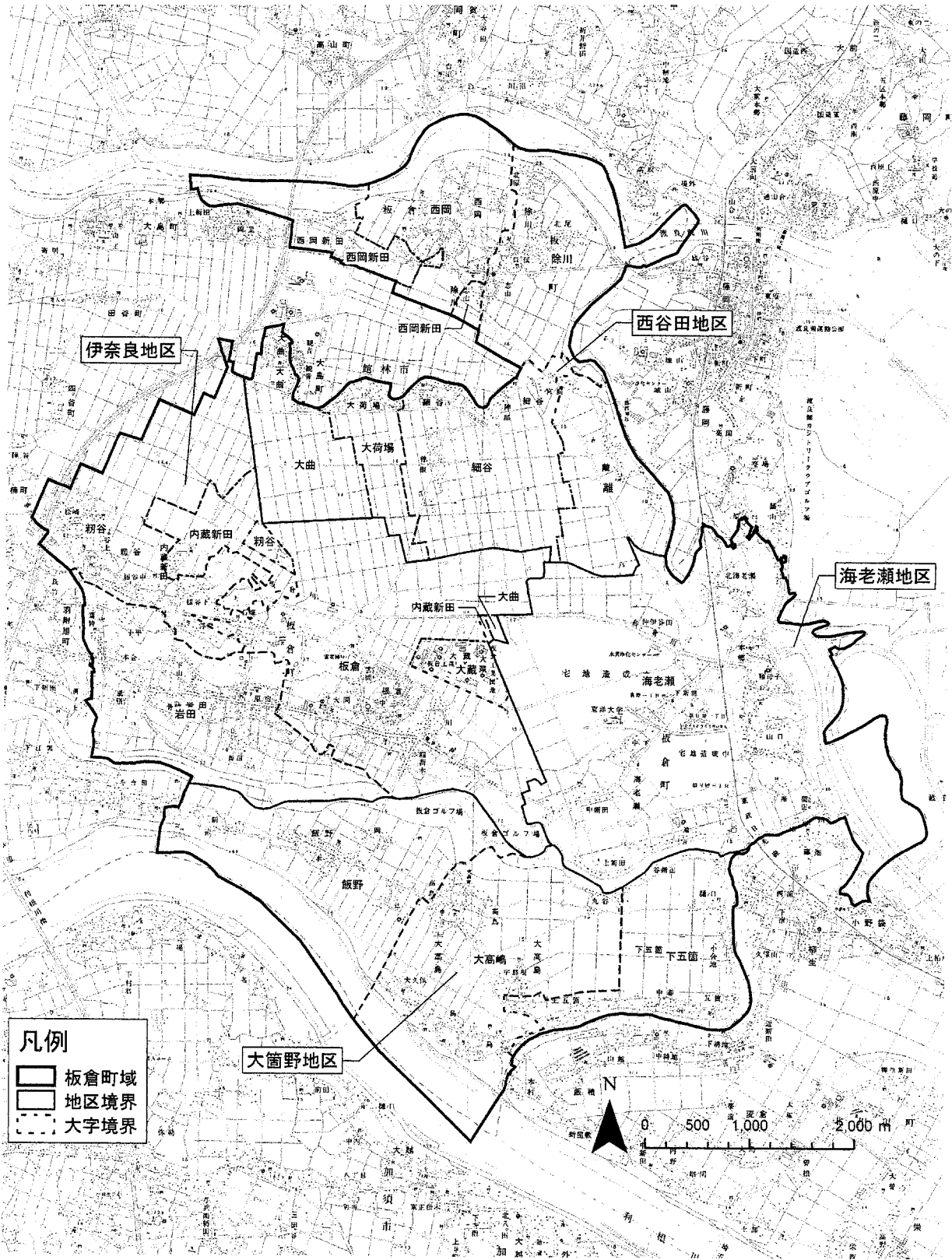


図1 板倉町全図

(出典：板倉町教育委員会『群馬県板倉町水場の文化的景観保存調査報告書』2008年)

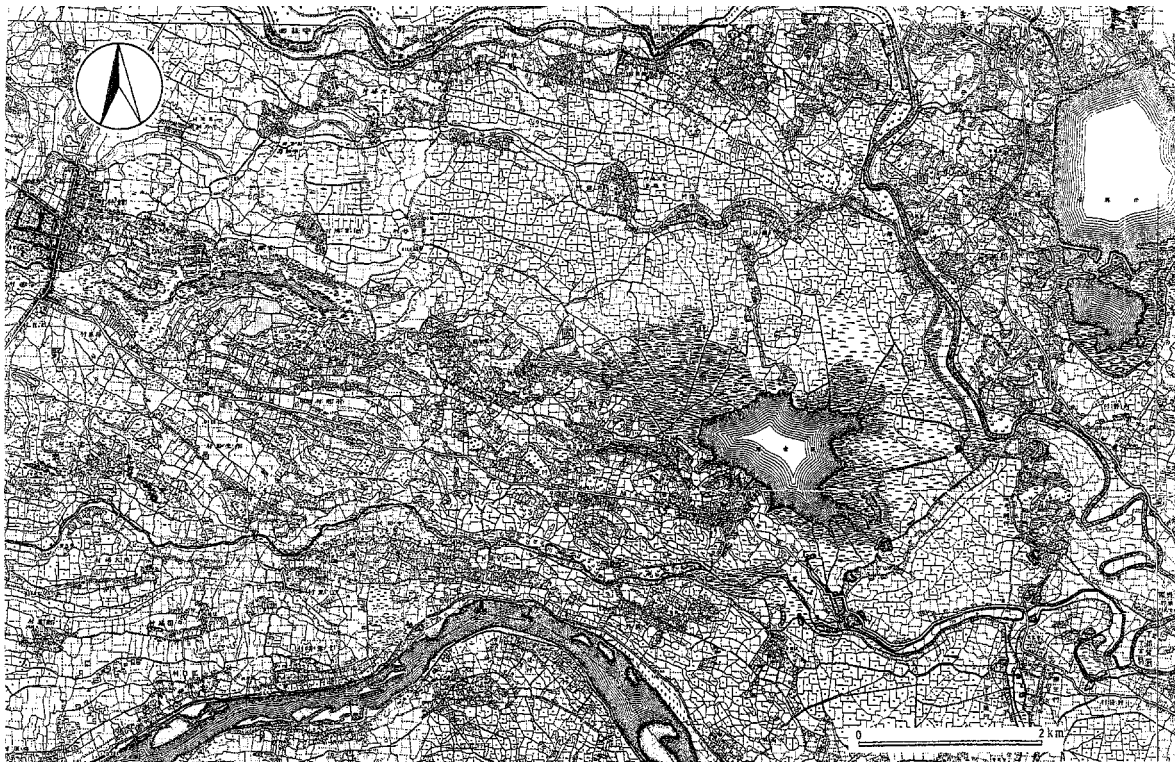


図2 明治前期の土地利用状況
(明治17年測量の第一軍管区地方迅速図「藤岡町」「館林」から)

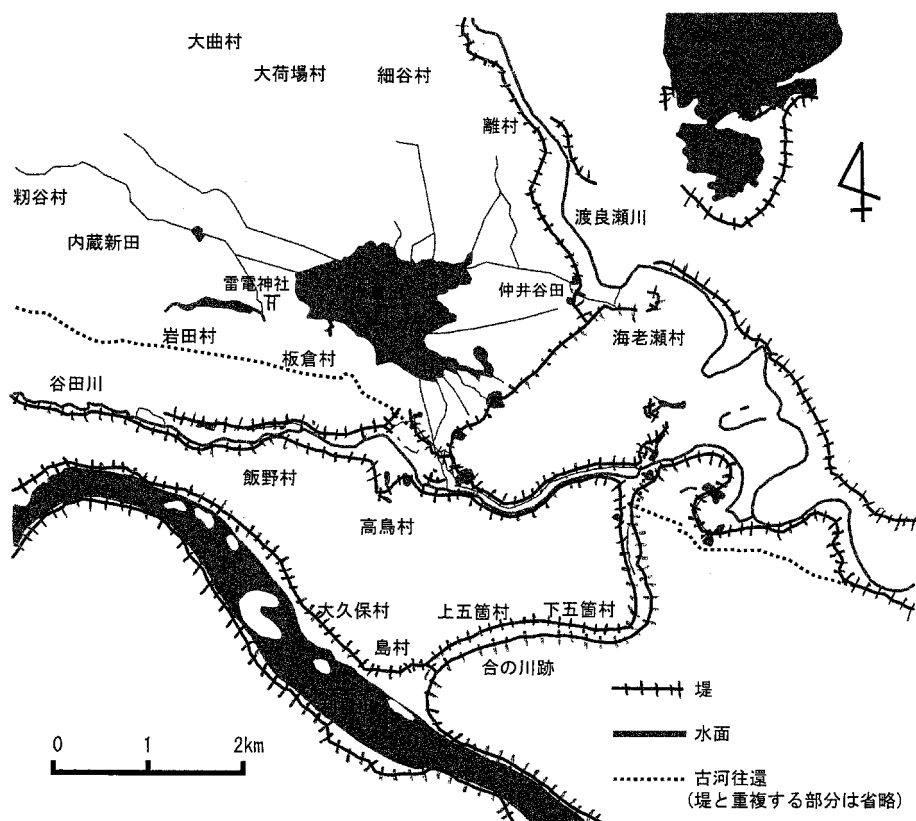


図3 板倉村周辺の地域概要(明治17(1864)年)
(出典：板倉町教育委員会『利根川・渡良瀬川流域の「水場」景観保存計画』2008年)

防が築造されていない。

近代改修以前の渡良瀬川は、藤岡台地に沿って南南東に流下し、台地を掘り割るようにして本郷地点から谷中村のある低地に出る。その後、広い堤外地を海老瀬七曲と呼ばれる激しい曲流をなして流下し、谷中村の南方、古河地先で支川の思川を合わせる。この後、大きく蛇行しながら約4 km 下流で利根川と合流する（図4）。

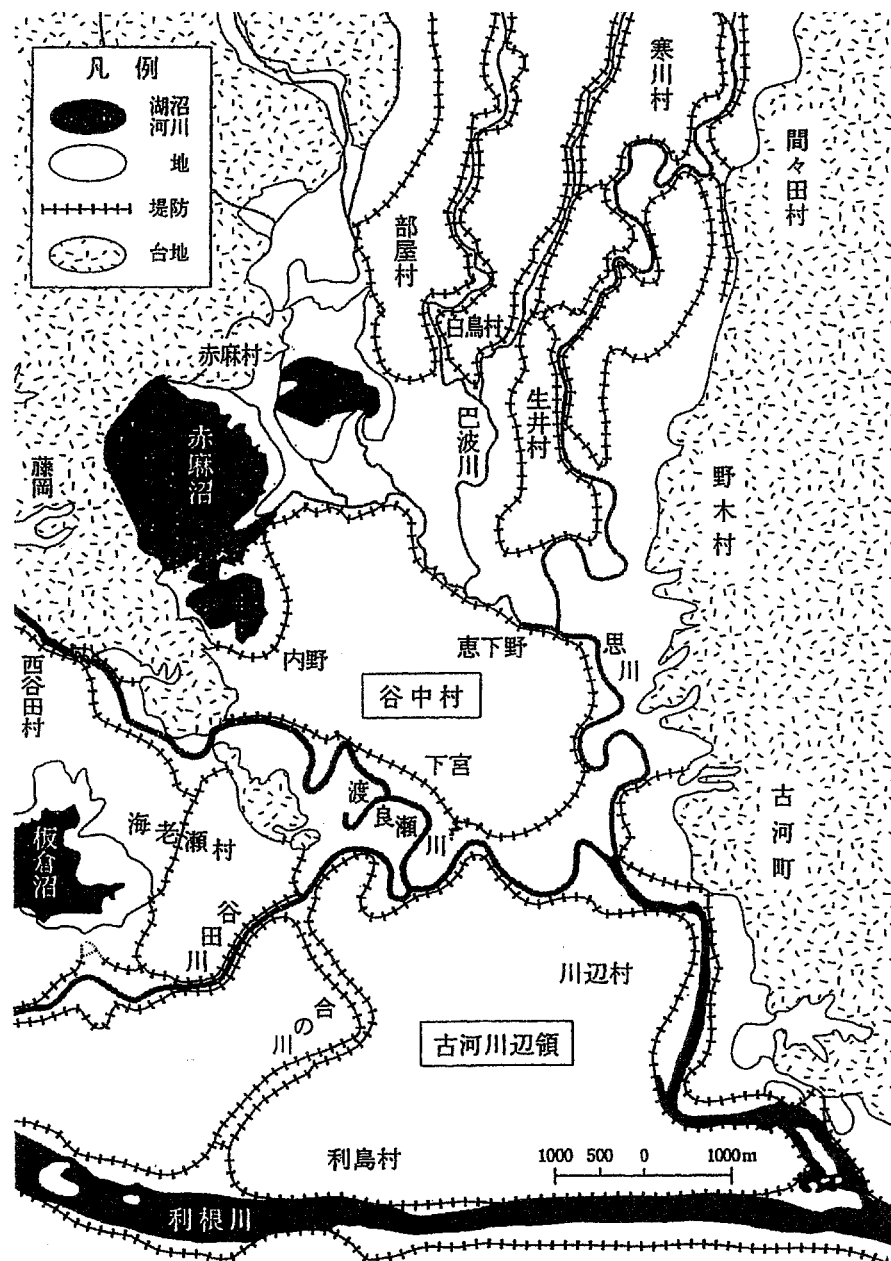


図4 渡良瀬川下流部概略図（迅速図を基に作成）

谷田川は、埼玉県北川辺町小野袋で渡良瀬川に流出するが、実に面白い形状をなしている。板倉沼と隣接する区域の河道が大きく膨らみ、蛇が卵を飲み込んだような形状となっているのである。その下流は、合の川の合流地点まで川幅は狭く兩岸ともしっかりと堤防が築かれている。板倉沼との間は漏斗状の堤防でもって繋がり、その間に道路を兼ねた堤防が築かれている。その堤防高

は、谷田川の本堤防と比べて低い堤防であっただろう。

なぜこのような形状になったのか。渡良瀬川からの逆流を防ぐため、渡良瀬川合流部近くの河道を狭めて兩岸をがっちりと固めたのだろう。一方、谷田川の洪水は、渡良瀬川の洪水が引くまで排出できない。排出できなかった洪水を膨らんだ河道区域に湛水させたのだろう。あるいは、排出できないため湛水がしばしば生じたその区域を囲んで堤防が築かれた、と言った方がよいかもしれない。

しかしそれ以上の谷田川の洪水が発生したら、あるいは利根川上流部左岸で氾濫した洪水が谷田川筋に流れ込んできたら、さらに後述するように天保12年（1841）に合の川締め切られる以前、合の川に大量の利根川洪水が流下してきたらどうなるのか。その時は、道路となっている低い堤防を乗り越えて板倉沼に逆流させたものと推測される。つまり谷田川の洪水は渡良瀬川に流出するのであるが、渡良瀬川の水位が高い時は流出できず、谷田川河道内さらに板倉沼周辺に湛水していたのである。

この河川秩序がいつ頃できたのは定かではない。渡良瀬川が合流する利根川の河床は、天明3年（1783）の浅間山噴火によって著しく上昇した。これに伴い渡良瀬川に利根川の逆流が増大するとともに、渡良瀬川の疎通も抑えられた。この結果、谷田川筋の洪水の渡良瀬川への流入も抑えられ、上流部での湛水量は大きく増大しただろう。

だが、天明以前の延享2年（1745）の図面にも、谷田川と板倉沼との間は漏斗状の堤防でつながっており、その原型はこの時には既にできていたと考えてよいだろう（図5）。天明以降、さらにこの形状は強化されていったと推測される。

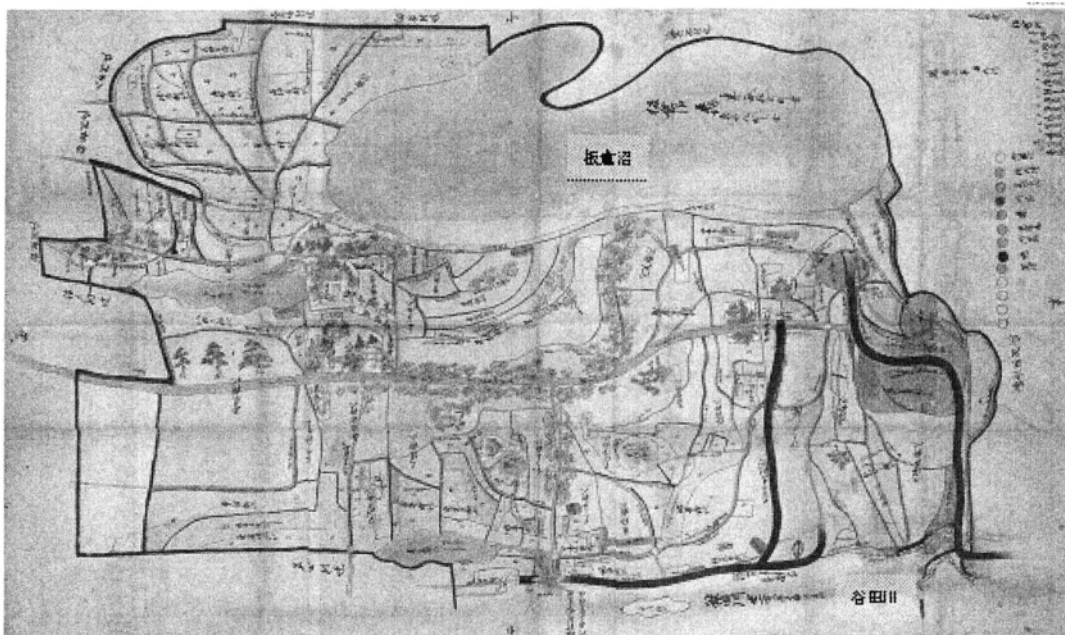


図5 延享2年（1745）の谷田川・板倉沼合流状況図（太線が堤防）
（出典：板倉町教育委員会『利根川・渡良瀬川流域の「水場」景観保存計画』2008）

なお板倉沼の開発も目的として元文2年(1737)、中田と古河間に水路を掘削し渡良瀬川の洪水を排出させる構想が立てられていた。江戸大伝馬塩町の紙屋・前田善冬から奉行書へ提出された「乍恐書付を以奉八御内見候」¹⁾に述べられているが、これにより「凡長拾町 全幅三町余」の新田開発が進められると主張している。また天明の浅間山大噴火後の寛政8年(1796)、上野国邑楽郡42ヶ村が奉行所に提出した「乍恐以書付御伺奉聞上候」¹⁾の中で、水害対策として古河と中田との間に新たな堀を開削し、渡良瀬川・思川・巴波川の洪水を流下させることを願い出ている²⁾。

板倉の流出先である渡良瀬川の洪水を早く流下させること、それは板倉にとって長い間の悲願であったといってよいだろう。それは、また利根川と密接に関わっていた。

さて板倉沼の周辺に堤防がないのも一見、妙である。谷田川からの逆流のみを考えれば当然、堤防があつてしかるべきである。しかし堤防はない。それは、特に北方そして東方から襲ってくる渡良瀬川氾濫に備えたためだろう。渡良瀬川の右岸堤の決壊は頻繁で、宝永元年(1704)から明治43年(1910)までの207年間に49回にわたったという³⁾。およそ4年に1回である。その際、板倉沼沿いに堤防があると、湖沼に流入せず耕地に湛水してしまう。堤防がないのが有利であったのである。

2.2 水との闘い

三方を利根川、渡良瀬川の大河川及びその派川に囲まれた板倉町は、その氾濫した濁流によって度々、席卷された。一たび氾濫すると、標高が低いところで約10mという自然条件もあって、なかなか水が抜けず、その湛水日数は長かった。この地域は「3年に1回は洪水に襲われた」という水場(常習氾濫地域)であったのである。水との闘いこそが板倉町の歴史であったと言ってよく、人々は常習氾濫を前提として生活を営んでいた。

その代表的なものが水塚(みづか)であり、揚舟(あげぶね)であり田舟である。水塚は、盛土したところに洪水被害から逃れるための家屋を建てたもので(図6)、米・みそ・衣類等を収納し、氾濫時に緊急避難する場所である(図7)。その土盛高は堤防の高さに合わせてあった(図8)。水塚の分布をみたのが図9であり、さらに図10で今日に至る集落ごとの消滅・現存状況を示している。現在、かなり消滅していることが分かる。

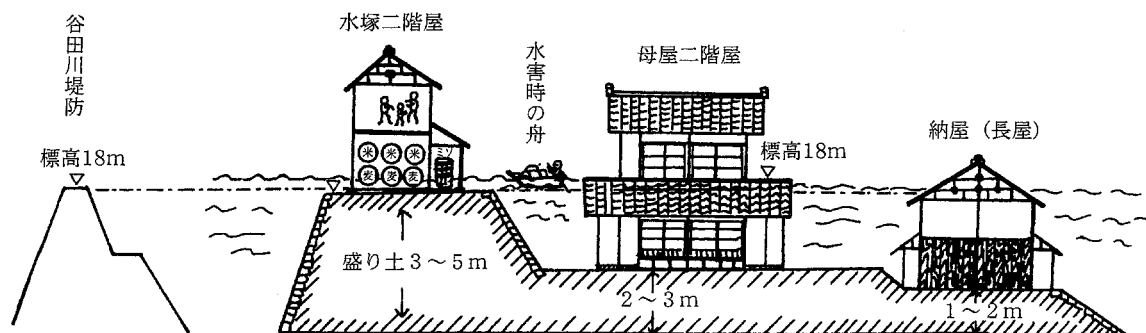


図6 板倉町の水塚と母屋の相関図(出典:『板倉町史 別巻四』板倉町、1980)

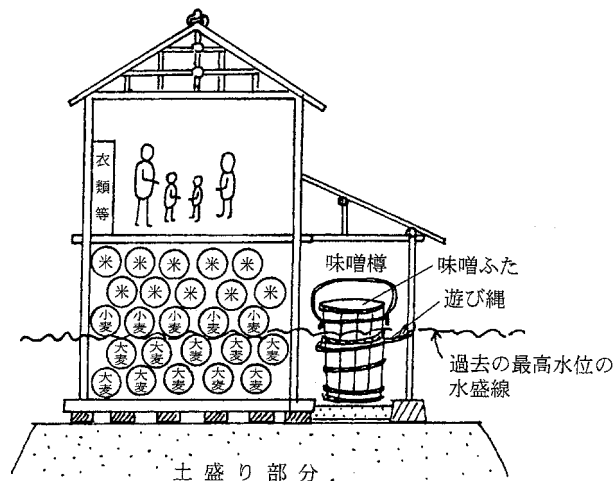


図7 水塚での穀類の積み方（水盛線より一段小麦を多く積む。）
（出典：『板倉町史 別巻四』前出）

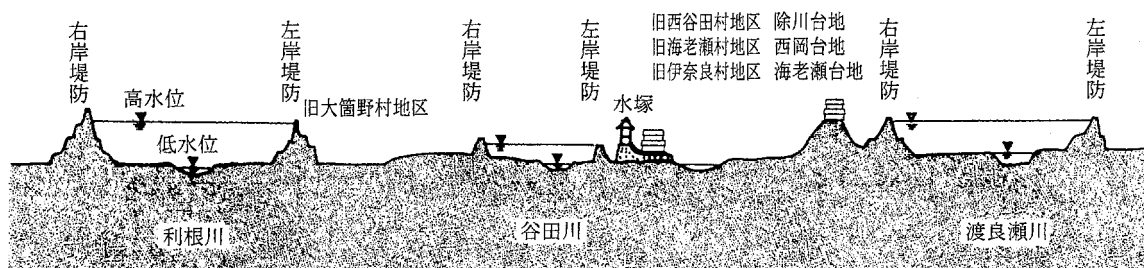


図8 板倉町の水塚と地形（出典：『板倉町史 別巻四』前出）

揚舟は、普段は一般的に母屋や納屋の天井あるいは軒下につるしてあるが、氾濫時に交通手段として使用するものである。穀物や家財道具を水塚へ運んだり、隣近所と連絡をとったり、あるいは稲穂の刈り取りなどが行われた。

また河川からの氾濫がなくても、水はけの悪い低湿地に湿田が広がっていたので農作業に田舟が使われた。田舟によって苗や肥料や稲束を運んだのである。また舟の上から稲の穂先を刈り取る舟刈りがしばしば行われた。水中での作業も伴う厳しい労働で、身体が冷えることによって「オコリ」（間歇性の高熱・出汗・戦慄悪寒が特徴の病気、突然の寒気ののち高熱を発するという症状を1日～数日おきに繰り返す）に多くの農民がかかっていた。

板倉を襲う氾濫水をさらに詳しくみると、北方そして東方から渡良瀬川の洪水、南方から利根川の洪水、さらに谷田川の洪水がある。谷田川には、自流域の降雨による洪水以外に、上流左岸を決壊した利根川の氾濫水がやってくる。これらの氾濫水は、渡良瀬川に、さらに利根川へ流出するため、結局は利根川の水位に制約される。利根川からは渡良瀬川筋へ逆流が生じていたが、特に天明3年(1783)の浅間山大噴火後、利根川の河床が上昇し逆流が顕著となった。近世以降の利根川を考察するにあたっては、天明3年がエポックとなる年で、その前後を区分して検討する必要がある。最終的には利根川へ流出することとなる板倉の湛水も、天明3年を境にし基本的条件が違ってきた



図9 水塚分布図（出典：『水防建築「水塚」調査報告書」板倉町教育委員会）

のである。水害が激化したと推定される。

利根川からの逆流が板倉に直接及ばなくても、渡良瀬川、谷田川の洪水が板倉地内の河道に滞留し、それがあの場合には氾濫していた。本郷から除川にかけて渡良瀬川の決壊が多いのは、海老瀬地先まで利根川の逆流があり、この結果、排出出来なくなったことに起因するだろう。河床上昇は

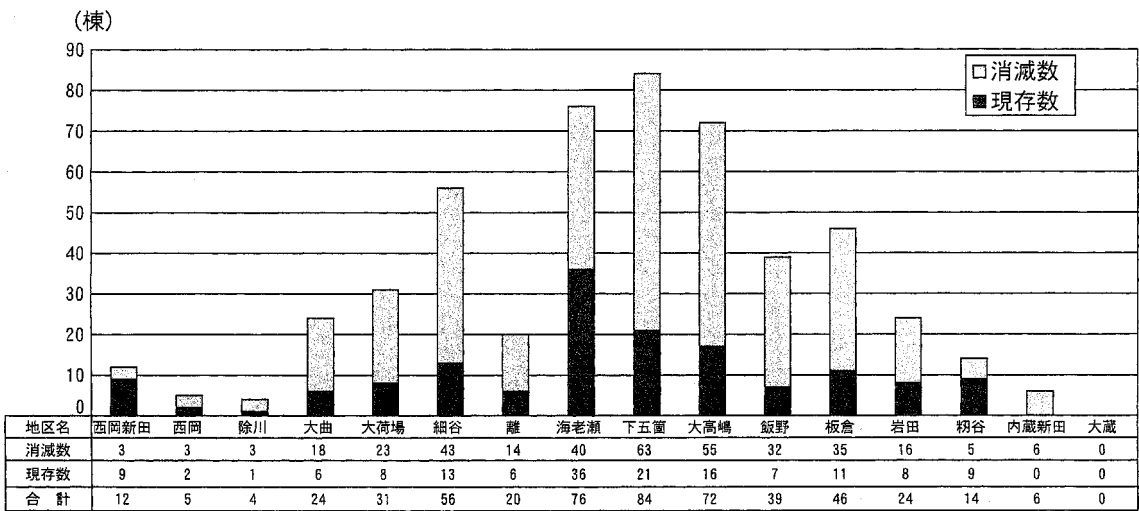


図10 水塚所有の推移（平成 13 年 7 月調査）（出典：『水防建築「水塚」調査報告書』前出）

明治になっても続く。

明治時代の水害

ここで改修以前の近代三大水害である明治23年（1890）、29年、43年出水についてみてみよう（表1、2、3）。板倉町のみではなく、板倉町に隣接する北川辺町、さらに利根川上流左岸、渡良瀬川上流右岸についても整理している（旧村名で述べる）。

特に、稀にみる大洪水であった明治43年出水では、板倉町内において渡良瀬川・利根川・谷田川の到るところで氾濫した。さらに利根川上流左岸・渡良瀬川上流右岸・谷田川上流の各地で氾濫し、堤内（河道の外）を溢れて流れ、板倉町に押し寄せてきたのである。この出水時、洪水の大きさからみて、どこが決壊してもおかしくなかったであろう。

表 1 明治23年 8 月出水による破堤箇所

	渡良瀬川筋	利根川筋
板 倉 町	海老瀬村仲伊谷田先56間 西谷田村除川大巻地先165間 （館林以東58ヶ村浸水）	
北川辺町		利根村飯積破堤

表 2 明治29年出水による破堤箇所

	渡良瀬川筋
板 倉 町	西谷田村離64間 西谷田村除川75間 西谷田村西岡127間 海老瀬村小橋塚20間

表3 明治43年 8 月出水による破堤箇所

	渡良瀬川筋	利根川筋	谷田川筋
板倉町	西谷田村 海老瀬村供養塚53間 海老瀬村大日東地先86間 海老瀬村仲伊谷田地先45間 海老瀬村下新田58間 海老瀬村行人塚30間	大箇野村飯野地先82間、110間	海老瀬村供養塚52間 海老瀬村各所 海老瀬村上新田31間 伊奈良村
北川辺町	各所で決壊（柳生、小野袋、飯積、栄・本郷入会、駒場・本郷入合）		
利根川 上流左岸		千代田村上五箇179間 千代田村下中森113間 大川村古海、永楽町舞木の境130間	
渡良瀬川 上流右岸	渡良瀬村傍示塚地先45間 海老瀬村上早田地先63間 多々良村矢場川堤20間		
谷田川上流			千代田村

2.3 雷電神社と水辺

板倉町には、雷電神社本宮がある。その場所は台地の突端部であるが、明治時代の銅版画により当時の状況をみると、大きな沼を背景として鬱蒼とした樹木で囲まれ、霊験あらたかな情緒をかもし出している（図11）。つまり水辺を「地」として、雷電神社本宮は「図」となっていたのであり、板倉沼・亥の子沼の水辺をバックとし、あるいは一体となった宗教建築物であった。その分布は、上流部では渡良瀬川・利根川本川、下流部では江戸（東京）湾とつなが古利根川・太日川（江戸川）



図11 明治34年頃の雷電神社周辺銅版画 (出典：『上野名蹟図誌(佐波・新田・山田・邑楽の巻)』1901年(復刻 歴史図書社 1980))

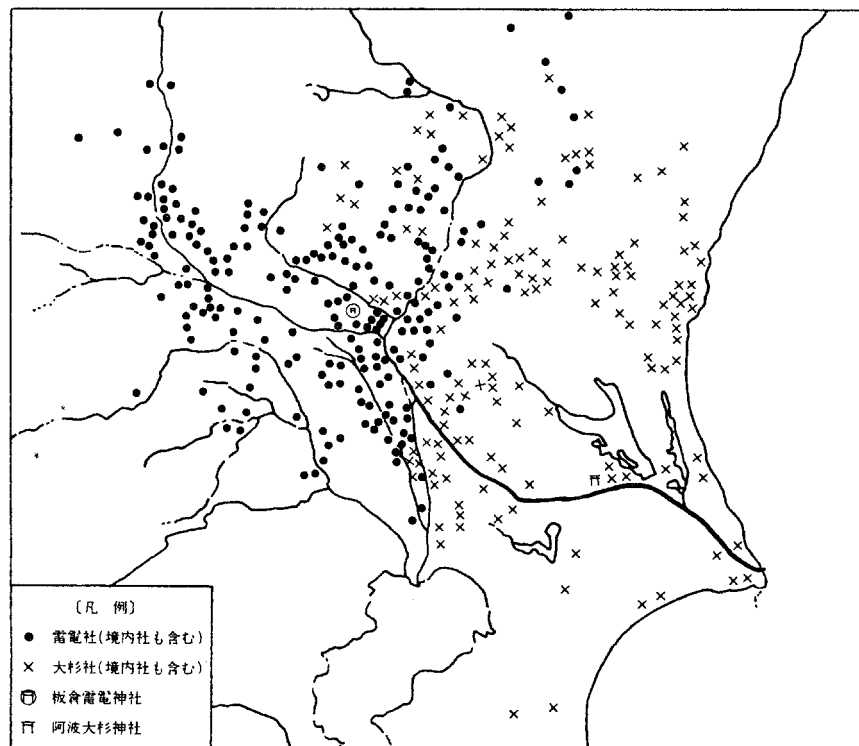


図12 大杉神社と雷電神社の分布

(出典：九学会連合利根川流域調査委員会『利根川』弘文堂、1971年)

周辺に多くみられるが、一つの文化圏を現しているのだろう（図12）。

さて、その創建について、永仁6年（1298）成立の上野国神明帳に従4位上大雷明神とある。これが当社だとすれば記録として最も古く、おそらく中世初めから中頃に建立されたと思われる。その周辺には、文永10年（1272）に社殿が造営された興蔵寺、そして親鸞の弟子・性信の座像が安置されている宝福寺がある。親鸞は、建保2年（1214）、流罪の地・越後から関東に入り、下総国豊田庄下妻の地に落ち着いたが、性信の手引きにより宝福寺に立ち寄り、「浄土三部経の千部読経」を始めている。その後、下総国に向かった。これらのことから、雷電神社の周辺は中世、重要な拠点であったと思われる。親鸞がどのようなルートで下総国に移動したのかは明らかではないが、かなりしっかりとした交通路が整備されていたのだろう。その交通手段として、湖沼・河が交叉している当地では舟の役割が大きい。この地での雷電神社の創設は、有力な港（船着場）を背景としていたことが十分、考えられる。

渡良瀬川を挟んで対岸の古河に、享徳4年（1455）、足利成氏が居城として以来、約100年近く関東内陸部に覇を唱えた古河公方の根拠地がある。古河と江戸湾との間には舟運ルートが確立されていたように、権力保持には各地と密接につながる必要がある。当時、物資輸送において舟運の果たす役割は大きい、その舟運根拠地が古河近傍の渡良瀬川・思川合流点から渡良瀬川・利根川合流点付近に有ったと考えるのは妥当なことだろう。因みに、渡良瀬川・思川合流点近くに中世、有力な舟運関係者がいたことが知られている⁴⁾。その舟運関係者が信仰の対象としたのが雷電神社であり、古河公方の政治権力と強いつながりをもって雷電神社は分布していったと考えている。

現存の雷電神社社殿は、天保6年（1835）に築かれたもので、その回りを彩る華麗な装飾とともに見事な宗教建築物である。ここには安政2年（1855）に奉納された「川俣河岸」の絵馬が残されているが、江戸時代後期にも本神社は舟運に従事する人達からも信仰されていた。亥の子沼は、別名、御手洗沼とも呼ばれていたが、干魃によって川の水量が少なくなると、御手洗沼の霊泉水を利根川に入れ、舟運のための水量の豊かさを祈ったという。また旧6月30日に行われる夏越し祭の時、真菰によって大きな輪（茅の輪）を作り神社に運び、祭りが終わった後に利根川に流したが、この真菰は亥の子沼の湿地から刈り取ったものである。この刈取時には、雷電神社の神官によって神事が行われていた（写真1）。



写真1 雷電神社宮司による儀式（板倉町資料）

雷電神社は、今日では雨乞い、雷除、雹乱除にご利益があると知られている。水害で痛めつけられたこの板倉の地に、干天時に祈願する雨乞いの神が祀られていることは興味深い。しょっちゅう雷が轟き落雷があったとの気象状況を背景とし、雨乞いの神社となっていたのだろう。さらに大きな湖沼があったということも重要な条件だったのだろう。板倉沼には龍が棲むとの伝説がある。「雷電神社に行ってなまずを食べて帰ってくる」というのが、来訪した信者の楽しみであった。



写真2 例祭時のクワの販売

また毎年5月に行われる例祭には、今日でも境内に賑やかな市が立つ。ここではクワをはじめとする農具が売られている。商品としてたくさんのクワが立っているのはなかなか壮観であるが（写真2）、群馬県安中市から来た業者によると、昭和40年代まではそれこそ飛ぶように売れ、刃と棒をその場で組み立てて売っていたという。クワは1年で刃が擦り切れてしまうため、周辺の農民はこの市で毎年、買い換えていたのである。雷電神社は地域においてこのような役割も有していた。

3. 歴史的河道整備

3.1 渡良瀬川の歴史的河道形成

渡良瀬川の流域面積は1396km²、うち山地面積は614km²、平地面積は782km²である。近代初頭の渡良瀬川中・下流の状況をみると（図13）、桐生を扇頂とする渡良瀬川扇状地の扇端部分に足利が位置するが、この後、渡良瀬川は東南東の方向に向かい、傍示塚から大島を経て西岡地先で狭い台地の間を掘割り河道となって流れる。この後、藤岡台地におつかる底谷村地先で90°近く曲流し、南々東に台地に沿って流下し、離を通り本郷地点で藤岡台地を掘割って栃木県下都賀郡に流出する。この後、広い堤外地を海老瀬七曲と呼ばれる激しい曲流をなして南下し、谷中村南方の古河地先で思川を合

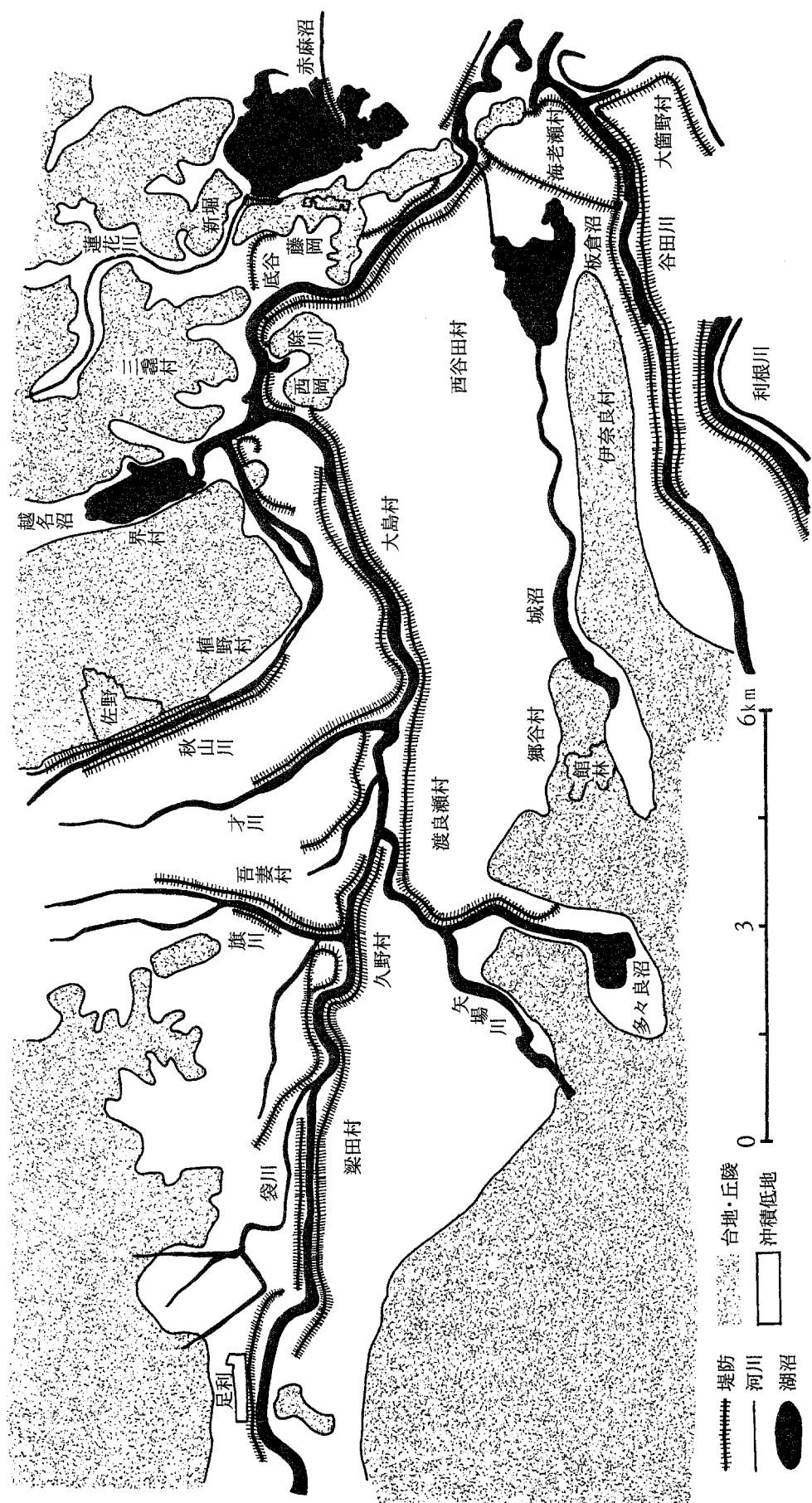


図13 渡良瀬平地中流部の改修前概況図

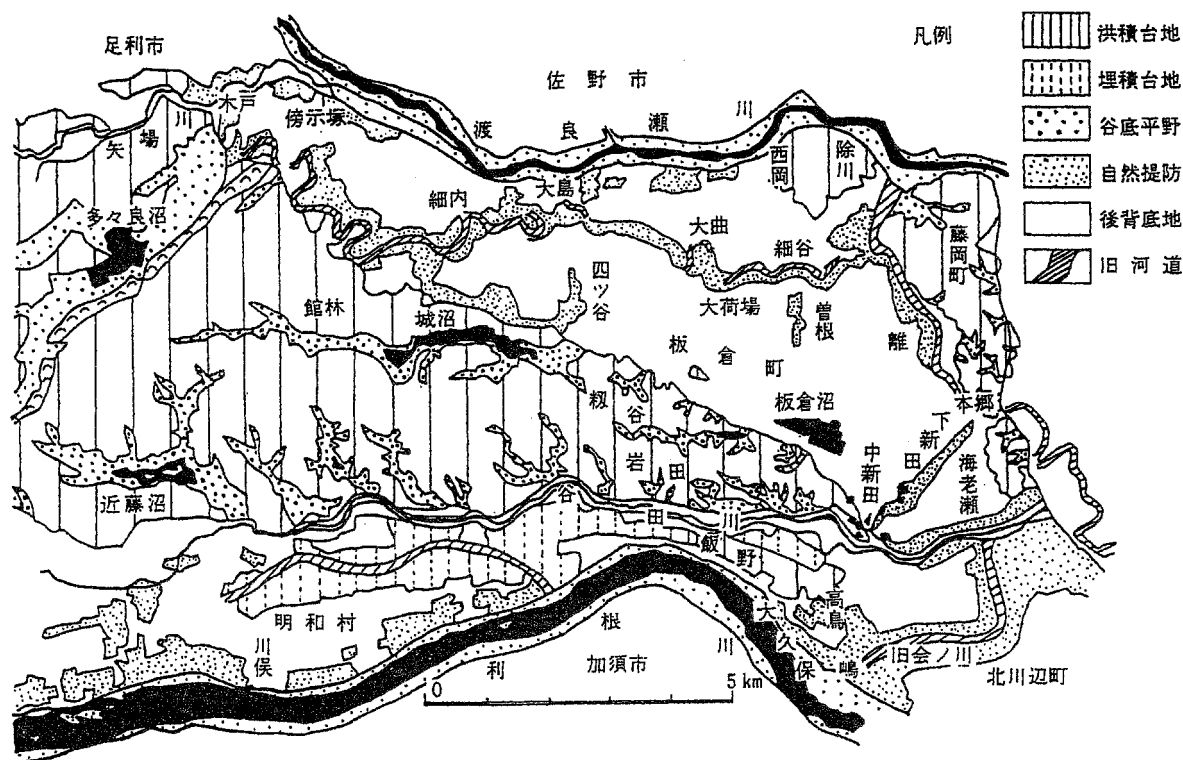


図14 板倉町の地形分類図

(出典：「渡良瀬川下流沖積低地における地形と水害」『群馬大学地理学論集第12巻』澤口宏、1984)

流する。注目すべきは、足利と西岡との間で合流している支川のほとんどすべてが霞堤となり、堤防によって締切られていないことである。それらの支川は、左岸側では袋川・旗川・秋山川であり、右岸側は矢場川である。

さて、渡良瀬川の南側に大きな連続した自然堤防がみられる。傍示塚から大島、大曲、大荷場、細谷を通り、離の上流で渡良瀬川に合流している(図14)。旧河道であるが、その蛇行状況から、左支川・矢場川が流れていたと考えられ、規模の大きさからいって渡良瀬川の本河道であったことは間違いなさだろう。因みにその上流部にある現在の矢場川は、栃木県(下野国)梁田郡と群馬県(上野国)邑楽郡の県境を流れている。渡良瀬川は、元々、この矢場川筋が本川といわれ、その後、矢場川筋を離れ、両郡とも下野国に位置する梁田郡と足利郡の間を流れる現況となったといわれる。

ところで傍示塚から西岡、除川、底谷、離に至る渡良瀬川河道筋であるが、興味深いことは西岡から除川、底谷まで関東ローム層台地を開削して流れていることである。沖積低地上を流れるその上流・下流と様相を異にし、掘割り河道となっている。本来の渡良瀬河道にしては不自然であり、人工的に付替されたものだろう。

『群馬県邑楽郡誌』によると、渡良瀬川の歴史的な河道整備として明記されているのは、文禄4年(1595)榊原康政の館林城主治世下、奉行である荒瀬彦兵衛と石川佐次右衛門の2名によって行われた築堤である⁵⁾。西は傍示塚から東は海老瀬に至る延長約4里9町(17.7km)余、堤防高2間(3.6m)ないし3間(5.5m)、堤敷10間(18m)ないし18間(33m)、馬踏(天端幅)2間(3.6m)ないし2間3尺(4.5m)に整備された。この後、寛文年中(1661~72)、徳川綱吉が館林城主の時

代、渡良瀬川堤防と堰・樋門の定式組合が定められ、官民費によって維持管理することとなった。

この河道変遷の歴史的経緯について、次のように判断している。戦国時代後期には下野国の梁田郡と足利郡の間を流れていた渡良瀬川本川が、榊原康政の治世下までに秋山川が流れていた西岡から除川・底谷の台地の間に押し込まれた。綱吉の時代には、矢場川も上早川田地点で渡良瀬川に合流させられ、台地の間を流れるようになった。

さて近世の渡良瀬川下流部の治水秩序をみると、右岸・館林藩領を守るという状況になっている。館林領は築堤で囲まれ渡良瀬川を西岡地先から台地に押し込み、その直上流部は築堤で締切らず霞堤とし、下野国である渡良瀬川左岸また矢場川左岸に遊水させる秩序となっていた。館林藩には、家康関東入国の時に徳川四天王の一人・榊原康政が配封され、後にはここから綱吉が5代将軍となっている。治水上、他地域に比して渡良瀬川下流部右岸は優位に整備されたのである。

しかし右岸側で水害が生じなかったというのではない。大出水の時、破堤・氾濫したが、その破堤箇所は西岡、除川、離、伊谷田で集中的に破堤している。つまり狭窄部の直上流を中心に破堤しているのである。

3.2 利根川旧派川・合の川の歴史的河道形成

古代には、合の川が利根川本川であったと推定されている。それは、この河道が武蔵国と上野国の国境となっていたからである。その後、利根川の主流は関東造盆地運動の制約などによって埼玉平野を南下していった。

利根川左岸堤防は、館林城主・榊原康政の治世下、文禄4年(1595)に古戸から大箇野下五箇村に至る18,329間(約33km)が築造されたといわれる⁶⁾。その大きさは高さ15尺～20尺(4.5m～6.1m)、敷15間～16間(27.3m～29.1m)、馬踏(天端幅)3間～5間(5.5m～9.1m)である。大箇野は現在の板倉町にあり、利根川沿いの古戸から合の川に沿って築造されたのである。当時、合の川が利根川本川とまでは



図15 近世後期の利根川・渡良瀬川合流状況図
(出典：『鷹見泉石関係資料』古河歴史博物館所蔵)

いかなくても有力な派川であったことは間違いない。なお寛保2年（1743）の大出水の後、大名のお手伝い普請によって利根川堤防は復旧されたが、左岸では備前岡山の池田藩によって那波郡戸塚谷から邑楽郡下五箇まで工事が行われた。少なくともこの時は、合の川がまだ大派川であったことが分かる。ただ、元禄15年（1702）作成の上野国絵図では、利根川との間は水路では繋がっていない「此所より田畑國境」と耕作地となっている⁷⁾。この時には通常時は水はなく、洪水時のみ流れていたのだろう。

この合の川が締切られたのは天保12年（1841）だが⁸⁾、対岸武蔵国との厳しい地域対立の中から締切りが行われた（図15）。それ以前から利根川右岸武蔵国とは、下野国下都賀郡も含めて広く渡良瀬川下流部との間で対立が生じていた。

対立の一つは、江戸川流頭部に設置された棒出しの撤去問題である（図16）。この棒出しは、天明3年（1783）の浅間山の大噴火に伴う大量の火山灰によって利根川河床が上昇し、それに起因して江戸川へ土砂が流入するのを防ぐために整備・強化された⁹⁾。つまり江戸川下流部の利益のために行われたが、棒出し設置は渡良瀬川下流部にとって湛水被害を増大させることとなる。渡良瀬下流部からは撤去を求める強い運動が行われ、結局は、天保年間（1830～43）に18間（32.7m）より狭くしないことが定められた。

同様に、権現堂川呑口にも寛政4年（1792）、杭出が設置された。その後、増築されて天保10年（1839）には千本杭といわれるほどになった。だが渡良瀬川下流部からの訴えにより、天保13年に撤去されたことが次のように述べられている¹⁰⁾。

「天保年間、栗橋栗餅下ニ千本杭ヲ築造シテ江戸川ニ向ヘル水勢ヲ沮遮シ、四縣ニ向ッテ幾多ノ水害ヲ醸シタリ。然ルニ、尚充分ノ策ヲ施シ江戸川ニ向フノ水勢ヲ防禦センガ為メ、下野渡良瀬川ト合流セシメシヨリ、其反動ノ禍害ハ上下両毛ニ波及シ、将来焦慮ニ堪エザルヲ以テ、天保十年、被害ノ各郡村連合シ以テ故障ノ旨ヲ幕府ニ訴エ、後三年ニシテ漸ク千本杭ト佐波村ヨリ中荒井村ニ達スル海鼠堤ヲ除去シテ、上野国島村ニ於テ間ノ川ヲメ切ル事ヲ允許セラン為ニ、著大ノ水害ヲ免カル、ニ至リタリ。」

また幕府により天保14年頃、赤堀川切り上げの工事が行われたといわれる。これらは棒出しを含めて相互に関係があり、天保年間、ひろく利根川の「水行直し」が行われたのである（表4）。この

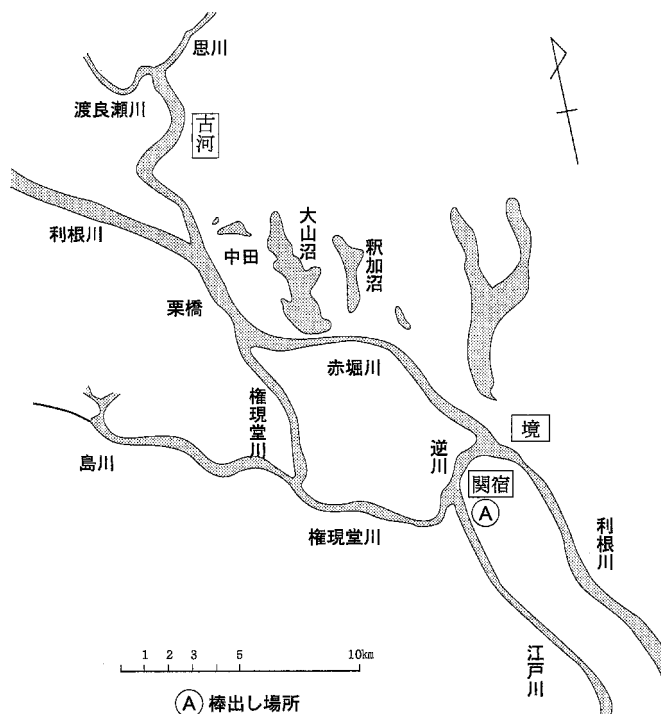


図16 栗橋～関宿周辺の近世の利根川状況

天保年間の「水行直し」を詳細にみてみよう。

表 4 天保年間 合の川周辺の動向

年 号	で き ご と
天保 7 年 (1836)	・利根川右岸（本川俣、稲子、発戸、下村君、堤、名、中大越、下大越砥）で堤防決壊
天保 8 年 (1837)	・大竹伊兵衛「権現堂川通川御普請并両川辺両悪水水落之方之義申上候書付」により権現堂川締切りを主張 ・普請役による地理直し
天保 9 年 (1838)	・浅間川・古川の締切り（自普請）
天保10年 (1839)	・左岸・古海で圪樋を新設し、利根川から農業用水を新たに確保（利根加用水。新設が認められたのは天保 9 年） ・権現堂川呑口の杭出しが増強されて千本杭といわれるようになった。（渡良瀬下流部幕府に訴える）
天保11年 (1840)	・上川俣から羽生領用水を取水（従来北川原用水の流末を利用していた） ・山口玄亭、古利根川再興論を幕府に提出
天保12年 (1841)	水野忠邦による天保の改革
天保12年～14年 (1841～1843)	・川口で圪樋を設置し羽生領の悪水を葛西用水（古利根川）への放流に成功 ・合の川締切り ・印旛沼開削計画の作成
天保13年 (1842)	・島川辺領、向川辺領の悪水排除のため権現堂堤に圪樋を埋設 ・千本杭と海鼠堤撤去
天保14年 (1843)	・赤堀川拡幅されたい（赤堀川拡幅を認める「赤堀川切広請書」が天保13年12月、下総国葛飾部、猿島郡の4村から出ている）。 ・印旛沼開削工事着工（6月）、中止（閏9月）
天保年間 (1830～1843)	・二合半領他2領の要求により棒出し強化、これに渡良瀬川下流部の下野国下都賀郡が反発、18間より狭めないことが約定された。
天保末年 (1843)	・舟橋随庵 古利根川再興論を幕府に提出

その最初は、対岸の武蔵国で天保 9 年 1 月から 2 月にかけて45日間で行われた浅間川の締切である。その締切区間は、流入口291間(529m)余、流出口115間(209m)であった(図17)¹¹⁾。天保 7 年、利根川右岸堤が決壊したが、これを契機として幕府譜請役による水行直しが行われ、締切が決定された。近世初期には利根川本川であった浅間川は、佐波と外野の間で利根川から分派し南東に向かった後、高柳から北西に向かって中新井と井坂間で再び利根川に流出していた。この流入口と流出口が閉じられたのである。利根川の河床上昇により武蔵国（埼玉県）向川辺領・羽生領を中心に、排水不良による深刻な湛水害が生じていたが、こ

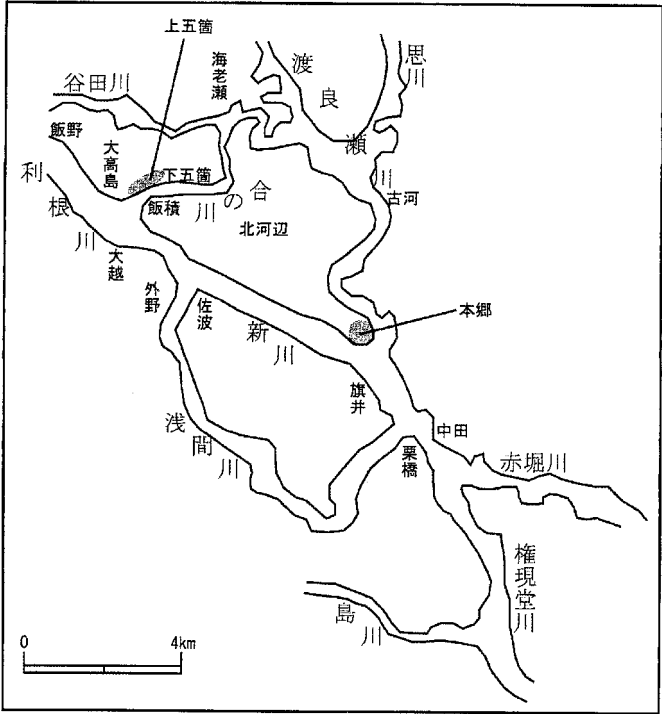


図17 利根川新川通周辺概況図

れを免れるために羽生領・向川辺領・島中川辺領農民の自普請によって行われた。続いて権現堂川呑口に杭出しが増強され、やがて千本杭と言われるようになった。

当時、一つの派川であった浅間川の締切、さらに権現堂川呑口での杭出し増強は、当然、利根川本川そして合の川への洪水流量の増大となる。対岸が反対を表明するのは当然だろう。因みに、当時の利根川堤防は右岸武蔵国側が「敷二十間余、馬踏4間余」であったのに対し、左岸上野国側は「敷十四五間、馬踏二間二過ギズ」と貧弱であった¹²⁾。

左岸側が浅間川締切に強く反発するのは、もっともなことであるが、その状況は、板倉町とその周辺を含めた上野国邑楽郡23村から天保9年2月に奉行所に提出された陳情書（小林家文書）でよく分かる。この中で次のように述べている¹³⁾。

「此度武州埼玉郡外野村佐波村地先古利根川之分凡長五百間余も新規築切ニ相成候而ハ古利根江落入候水新利根川壱筋ニ而ハ中々以水吐兼依之當領村々ニ而満水ニ相成候囲堤茂自然与殊 殊近年利根川通り堤数ヶ所危難之場所茂多分有之然処右場所築切ニ相成候而ハ満水之節迎茂囲堤保不申村々百姓住居も相成兼甚難儀至極仕候何卒此度古利根 切之儀者御省被成下置候」

（この度武州埼玉郡の外野村・佐波村地先の古利根の分へ 凡そ五百間余も新しく堤築きになりましては 古利根へ落している水を新利根川の一筋の川では水の中々落としかることが出来ません。そうすると又 当村々は満水になれば囲堤も最近は数ヶ所も危ないところがあり ここで右場所に堤築きなされては 満水の時は囲堤が保たず大水になり當領村々の百姓住居もできなくなりこの上なく難儀で御座います。どうか古利根堤築きのことは お止め下さる様お願い申し上げます）。

反対運動を強力に進めていく中で、天保12年の合の川締切に成功していくのだが、しかし浅間川と合の川締切により洪水は下流に集中してくる。あわせて千本杭の撤去は、権現堂川への流下が増大する。これを避けるために天保14年、赤堀川拡幅が行われたのである。一方、赤堀川拡幅すると下利根川の洪水が増大する。これに備えて、印旛沼から江戸湾に抜ける水路の開削が天保の改革の一環として行われたのだろう。しかし改革を推進した水野忠邦の失脚により、この開削は成功しなかった。

利根加用水の取水

天保10年(1839)、利根川左岸でもう一つの河川事業が行われていた。上流部の古海で圀樋を新設し、利根加用水として利根川から農業用水を新たに確保したのである。現在の千代田町・明和町に広がる利根川左岸の水田は、渡良瀬川の矢場堰から取水した休泊堀用水の末端であって、渇水時には干魃被害で大きな困難が生じていた。このため、すぐ近くを流れる利根川から取水したいと期待したのは当然だろう。

文化3年(1806)、文政4年(1822)と、古海と川俣の2ヶ所からの取水を地域の人々は幕府に願ひ出た。だが認められなかった。しかし天保9年に認められたのである。この背景としては、同年に対岸の武蔵国で浅間川の締切りが認められた。これへの対応からであろう。浅間川の締切りに対して反対した上野国側を納得させる条件として、幕府は長年の左岸側の要求を認めたのだろう。だ

が取入口は古海のみとなった。その理由の重要なものとして、現板倉町に位置する飯野・高鳥・下五箇・島の反対があった。つまりその水は、最終的にこれらの地域にやってきて湛水害を生じさせるというので反対したのである。

上野国の利根川左岸側は一枚岩でなく、その内部に上・下流の地域対立を抱えていたことが分かる。なお古海からの取水は、埼玉平野を潤す大灌漑用水である見沼代用水、葛西用水の取水位置よりも上流である。極めて有利な位置での取水に成功したのである。

4. 渡良瀬川の近代改修

利根川で治水を主目的とする近代改修に着手したのは、明治33年（1900）である。当初は第1期工事として河口から佐原までの42kmであったが、40年4月、佐原から取手に至る52kmの第2期工事に、42年4月、取手から上流群馬県の芝根に至る110kmの第3期工事に着手した。この改修事業の竣工は、昭和5年（1930）度である。

渡良瀬川は、利根川第3期工事着手の翌年の明治43年（1910）4月からの着工となったが、それに至るまでに足尾鉍毒事件という大きな社会問題があった。43年8月、全国的な大水害があり、これを契機に第1次治水長期計画が樹立され、翌年度から全国の大河川で治水事業が進められた。だが利根川の一支出である渡良瀬川改修は、それに先立って着工されたのである。この時までには政府が治水事業に着手していたのは、木曽川、淀川、利根川などの10河川であり、首都東京を流下していた荒川は、未だ着工されていなかった。

足尾鉍毒被害は、足尾銅山から出た硫化銅を含む廃鉍が洪水によって下流に押し出され、それが田畑に氾濫して生じた。堤内地に渡良瀬川洪水が氾濫しなかったら、たとえ河道に廃鉍が堆積しても、堤内地の田畑は鉍毒にさらされることはない。このため鉍毒反対運動は、鉍山経営の廃止とともに渡良瀬川改修を求めており、渡良瀬川治水を包摂するものだった。さらに渡良瀬川治水にとっても、銅山採掘に伴う荒廃した上流山地からの多量の土砂流出は重大な支障となる。鉍毒被害と渡良瀬川治水は、密

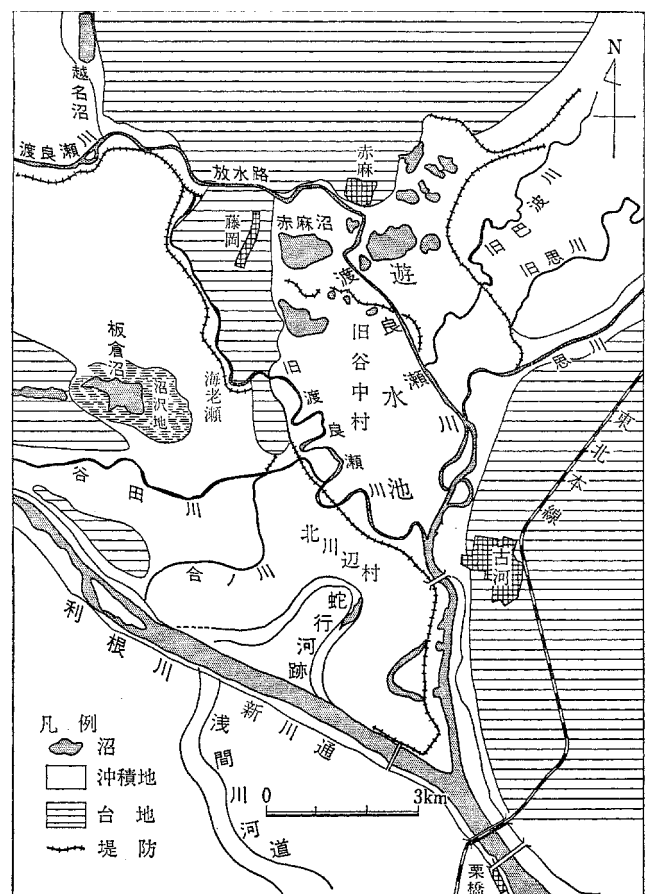


図18 昭和初期頃の渡良瀬川下流藤岡放水路と旧流路海老瀬七曲り（昭和5年頃の5万分の1地形図による）（出典：小出博『日本の河川研究』東大出版会、1972年）

接、不可分な関係にあったのである。

渡良瀬川改修計画は、周知のように藤岡台地を開削し、赤麻沼と谷中村を中心に約3000町を遊水地とするものであった（図18）。これにより約2500人が住んでいた谷中村は廃村となったのである。この結果、板倉にとって最も警戒すべき除川以下の渡良瀬川河道は廃川となった。また遊水地下流部も旧古河城跡地の掘削などによって新河道が整備され、旧状を一新したのである。

ところで藤岡台地を開削する人工水路であるが、この計画と同様のものが幕末、邑楽郡田谷村住民大出地図弥から提出されていた。館林藩に献策したところ認められたので、大出は多くの人々を指揮して測量を行い、詳細な実測図を作成して起工しようとしたが、その開削台地が館林藩でなかったため挫折したことが伝えられている¹⁴⁾。

一方、渡良瀬川対岸の栃木県下都賀郡・安蘇郡の村々から、その対抗策が明治4年（1871）、行政区域である古河県、日光県に嘆願書として提出された¹⁵⁾。渡良瀬川の秋山川合流点直上流から板倉沼に新河道を開削し、合の川との合流地点で渡良瀬川に再び落とそうとしたものである。嘆願した村々は、現在の佐野市が中心であるが藤岡町も加わっている。

渡良瀬川改修をめぐる、日本の河川では当然のようにみられる地域対立が、渡良瀬川でも生じていたのである。新河道をめぐる対立以外でも、渡良瀬川中流部において、左岸栃木県と右岸群馬県との間で渡良瀬川治水をめぐる激しい対立があった。

では最下流部に位置する板倉と谷中村の間では、地域対立はなかったのだろうか。海老瀬の一部を除いて谷中村と向き合うという形で直接、利害関係のある堤防は少ない。だが明治32年（1899）12月、谷中村の栃木県知事当ての陳情書に、「群馬県北海老瀬村堤防ニ於ケル、本村接続渡良瀬川堤防、僅ニ三百余間モ馬踏三間表裏式割以上、独り本村ノ堤防ニ限り、壱割以内ノ堤塘悲惨ノ極ヲ蒙ルハ真ニ難置事実」と述べられている¹⁶⁾。同じ法線上の堤防であっても、板倉の一部である北海老瀬の方が頑丈であったと指摘している。

大正4年（1915）9月、谷中村内のこの堤防が海老瀬の住民に破壊されるという事件があった¹⁷⁾。この堤防は一部、古河と藤岡とを結ぶ県道となっていたが、9月の出水で「金塚堤防ノ切レル前ヨリ仮定県道ヲ船ニテ通行シ居ル、其後堤防決壊迄ノ渡良瀬川ト遊水地ノ水量ノ差ハ二尺位ニテ仮定県道ノ上ハ一丈位ノ水量アリシ」といっているように、渡良瀬川の出水で堤防上を乗り越えて谷中村に流入していた。この状況下で、旧谷中村内野地内の堤防を海老瀬住民5人ほどが鋤、鍬によって破壊し、渡良瀬川洪水を旧谷中村に流出させたのである。

なお渡良瀬川改修事業着工にあたっては、事業費負担を国そして関係4県で定めなくてはならない。各県の分担については県会の決議が必要であり、それを待って事業は開始された。各県の費用分担は、栃木県130万3,000円、茨城県39万6,000円、群馬県38万8,000円、埼玉県26万9,000円の合計234万6,000円であった。これは事業費750万円の約31%であった。

この事業費負担について、これまで歴史的な激しい地域対立があったため、それぞれの県会で熱心に議論された。茨城県会では明治42年（1909）9月23日、臨時県会に諮問されたが、賛否は見送られた。次の県会は11月1日からの通常県会であったが、開会と同時に再び諮問され審議の結果、11

月30日に可決された。

板倉町を含む群馬県邑楽郡の渡良瀬川早期改修の要求は極めて強く、可決しない茨城県に対して邑楽治水会大会の決議をもって陳情した。渡良瀬川改修がいかに当地域にとって重要であるかが分かる。当地域の安定そして発展にとって、渡良瀬川改修は基本的な課題であったのである。なおこの治水会の指導者は、鉍毒反対運動を引っ張っていったリーダーたちであった。

渡良瀬川改修事業は、当初予定より3ヵ年遅れ、大正15年（1926）度に竣工した。

5. 昭和22年（1947）のキャサリン台風による水害

近代改修の竣工以降での大きな氾濫・水害としては、昭和16年（1941）の谷田川決壊がある。渡良瀬川上流で300mm以上の大豪雨があり、渡良瀬遊水地の水位上昇により吐けなくなった谷田川筋で海老瀬村供養塚地先37間（67.3m）が決壊し、海老瀬・伊奈良・西谷田の旧3ヶ村が泥沼となったのである。

その後、昭和22年（1947）9月、カスリーン台風により近代改修によって築造された渡良瀬遊水地堤防が決壊し、板倉町は1ヶ月以上にもわたる大湛水となった。この時の氾濫・水害状況を詳しくみていこう（表5、図19）。

板倉町を襲った氾濫水の決壊地点は、渡良瀬遊水地堤防の海老瀬字北道祖堤防と本郷地先堤防の2ヶ所であり、前者は9月15日午後11時50分に165m決壊した。この2ヶ所の地点は、それほど離れていない。それ以前の午後11時頃、本郷付近の遊水地堤防から溢水があったという。なぜこの地点が決壊したのか、もちろん一概に言えないが、本郷の決壊堤防は旧渡良瀬川河道上に設置されたものである。旧河道上では基礎がしっかりしていず、ここから決壊する例は日本において多々見かける。

他の堤防はどうであったのか。板倉町内の利根川堤防では、水防団全員出動としての水防活動が行われていた。土俵を置き、青竹をさしこんだりしていたが、水位は堤防天端から3尺（約90cm）のところまできていた。さらに利根川土手から手が洗える状況となったが、9月16日0時過ぎに水位が下がりはじめた。対岸下流の北埼玉郡東村（現大利根町）新川通地先の東武日光線利根川橋架1km上流、渡良瀬川合流点から2km上流地点で、利根川右岸堤防が340mにわたり決壊したためだろう（決壊時9月16日0時20分）。また渡良瀬川右岸では、埼玉県北川辺町の三国橋付近の堤防が利根川東村とほぼ同時刻に決壊し、北川辺町は全地域大湛水となった。

渡良瀬川をみると、西岡台地の直上流に位置する西岡新田の神明西の堤防が決壊寸前の状況であった。堤防の中段から30mにわたり漏水し、白糸の滝のような状況であった。また水田と堤防の犬走りの中間あたりから、大噴水のように水が噴き出していた。決壊を免れたのは、下流・渡良瀬川遊水地海老瀬の堤防決壊であり、これにより水位がどんどん低下し、西岡地先は免れたのである。

こうしてみると、板倉町内の利根川左岸堤、また渡良瀬川右岸堤が決壊しなかったのは、たまたまの幸運であったことが分かる。ここで切れても何ら不思議ではなかったのである。また北川辺町を襲った洪水が板倉町に流入してもおかしくなかったが、必死の水防活動により県境となっている

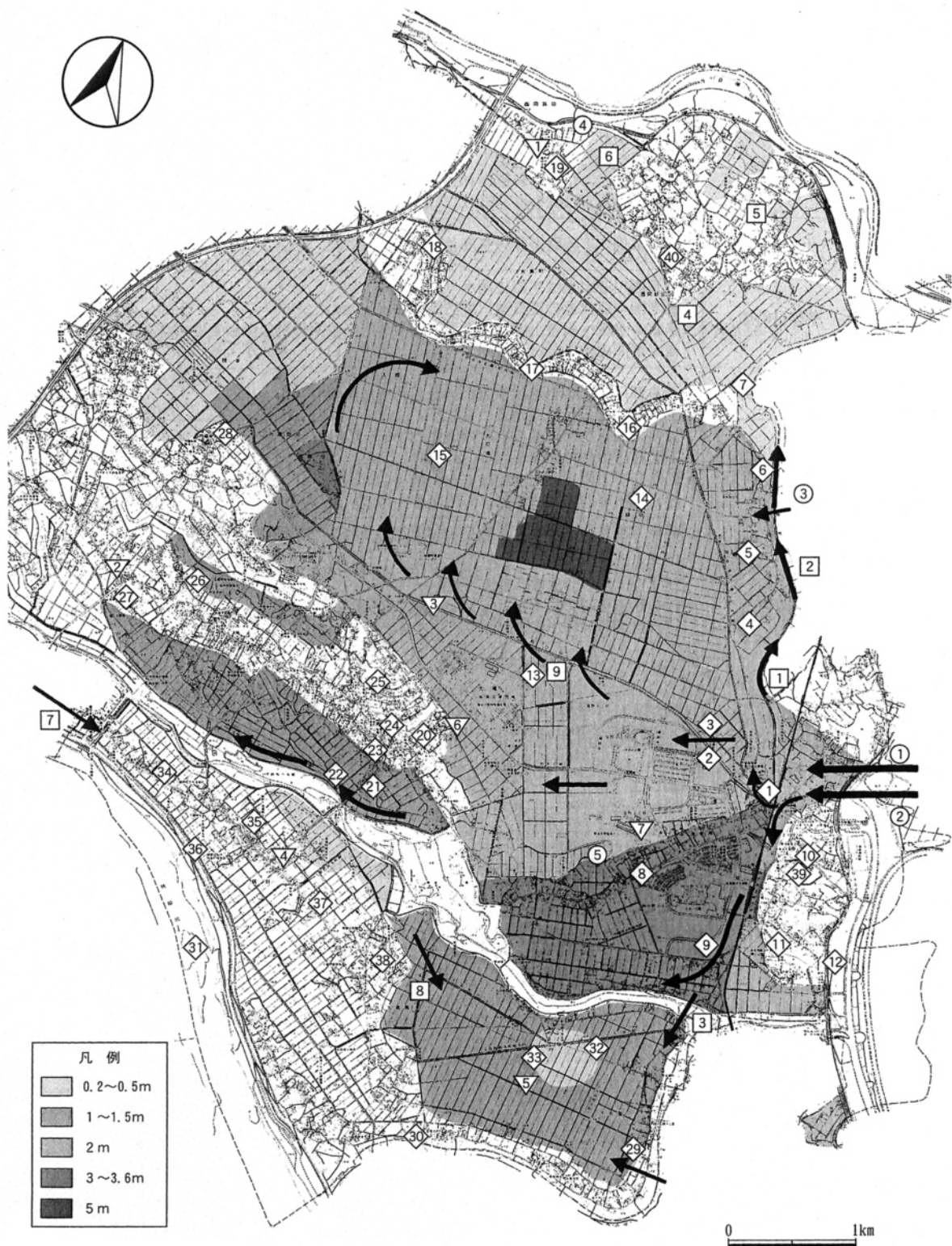


図19 カスリーン台風決壊後の濁流浸入および状況位置図（出典：『水防建築「水塚」調査報告書」前出）

を上部40cm残して水中に没した。この氾濫水が、目で見えるかたちで引き始めたのは9月18日になってからであるが、湛水日数は20日にも及んだ。

なお谷田川と利根川右岸堤で囲まれている大高島や下五箇には、明和村の方から谷田川氾濫水が

堤内の県道に沿って流入してきた。海老瀬での渡良瀬川氾濫水が谷田川右岸を乗り越えてこの地区に来ることはなかったが、堤体にある樋管等を通じて流入してきた。

水防として注目すべきことは、海老瀬で決壊・氾濫する前に自主的に避難活動をしていることである。渡良瀬川・利根川の水位上昇を受け、それを現地で見、あるいは水防団からの情報を得て、各自で避難活動を行った。例えば水塚への家財道具・米俵等の移動、牛・馬も含め台地・堤防上への避難、揚舟使用の準備あるいはイカダ組み、飲料水の備蓄である。さらに座敷に縁台を置きその上に米俵を置く、家が流されないように柱と柱を竹でつなぐ、浮かないように家の柱と梁に米を2斗袋に入れて吊す、井戸に汚物が入らないようにフタをする、などである（図20）。

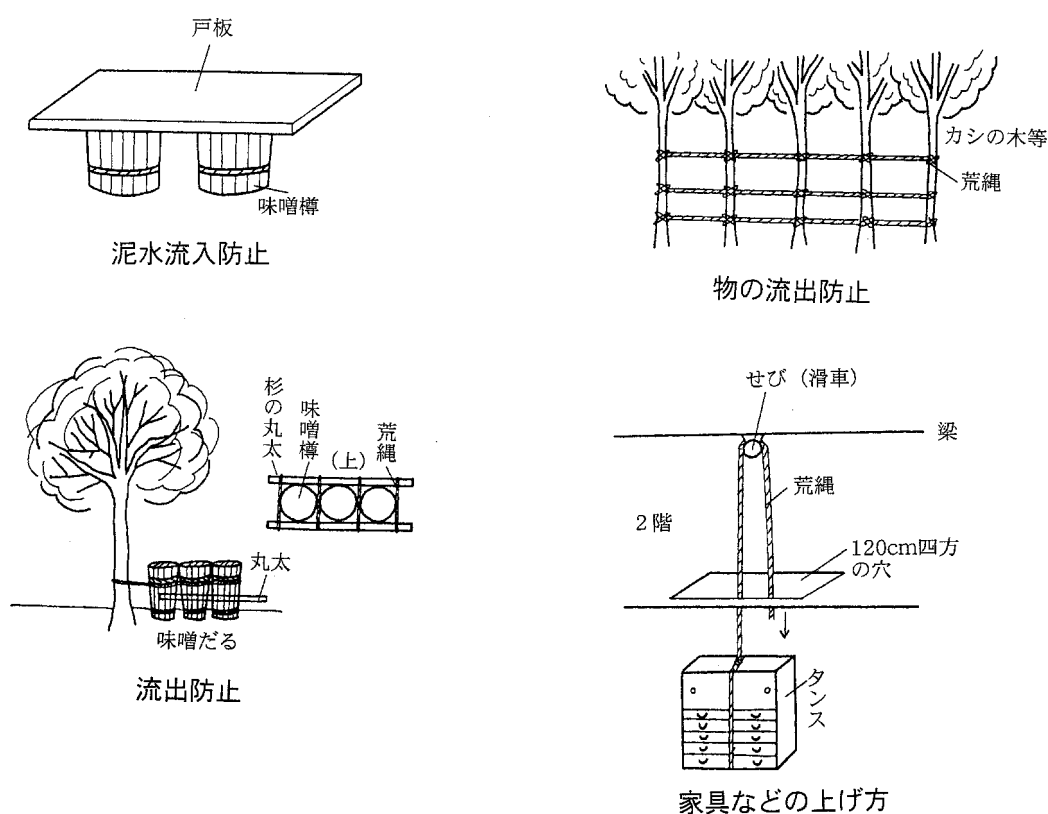


図20 出水時の対応（出典：『波動3』板倉町教育委員会、1999年）

この水害後、利根川・渡良瀬川では新たに改修改訂工事が計画され、堤防の嵩上げ・拡幅が行われた。

6. 用排水システムの整備

板倉の開発・整備は、その排出先の渡良瀬川さらに利根川と密接不可分なものである。両河川の整備水準に従って、板倉の整備も規定される。板倉が本格的に開発が始まるのは、利根川・渡良瀬川の近代改修が概成してからである。

利根川改修事業の竣工は、昭和5年（1930）度であるが、それに先立つ大正15年（1926）度、渡

良瀬川改修事業は竣功をみた。それまで3年に1回は板倉に水害をもたらしたという河川状況が大きく変化した。板倉が新たな展開に踏み出す基盤状況が整備されたのである。

しかし板倉は、標高が10～15mと低い沖積低地が広がっており、その条件から排水は、自然に行えるものではなかった。利根川、渡良瀬川の水位が高くなったら、降雨は流出することなく低地に湛水する。板倉沼は、自然に干上がることはなかった。そのためにはポンプによる強制排水が必要であった。

このため、郷谷、西谷田、海老瀬、大筒野、伊奈良、大島、赤羽の旧7村¹⁸⁾の参加で、邑楽東部農業水利改良耕地整理組合（組合員約2900人）が大正15年に設立され、県営邑楽郡東部用排水改良事業が着手された。耕地整理組合は昭和2年(1927)、邑楽耕地整理組合と名称を変更したが、排水事業として板倉排水幹線などの排水路を整備するとともに渡良瀬遊水地への二ヶ所のポンプ場（板倉排水機 … 第一機場、大筒野海老瀬排水機…第二機場）が設置された（図21）。この事業で板倉沼辺の湿地はかなり耕地として開発が進められたが、板倉沼はそのままとされ、用水源また排水先の役割を担った。

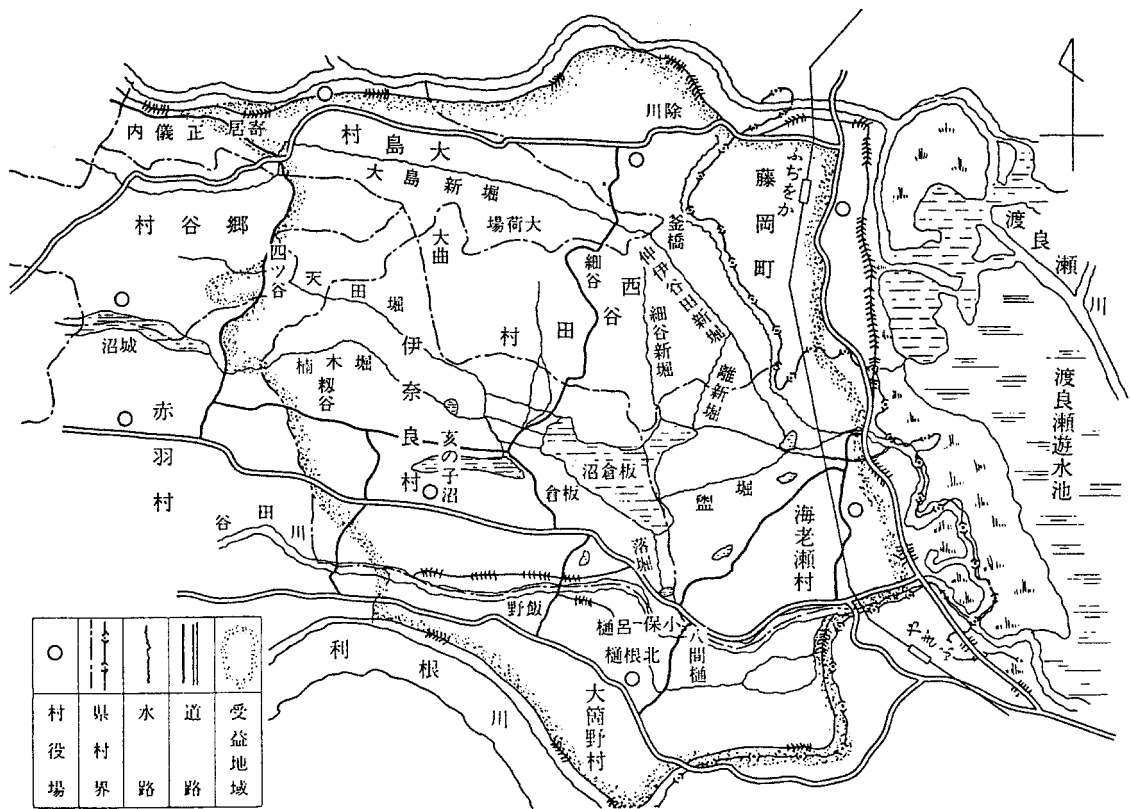


図21 県営邑楽東部用排水改良事業図（出典：吉田彦三郎編『邑楽土地改良事業史』邑楽土地改良区、1982）

用水源としては、別途新たに渡良瀬川に求められ、大島地先に取水口が設置された。旧来の用水源は待矢堰両堰を取水源とする藤川用水からの供給（458町歩）、谷田川（176町歩）城沼（116町歩）と板倉沼（467町歩）であり、その他湧水（118町歩）また天水田（157町歩）もあった。なお新用水源は、板倉沼沿岸地域に供給するもので、排水改良の結果、新たに開田する360町歩を合わせ、計900

表 6 県営邑楽東部土地改良事業における利水計画

		ヘクタール	毎秒立法米	
渡良瀬川	邑楽頭部用水	面積 1,156.0	取水量 3.500	揚水機による
	頭沼用水	〃 50.0	〃 0.272	
	待矢場用水	〃 132.0	〃 0.320	
利根川	邑楽揚水（坂東用水）	〃 182.4	〃 0.500	揚水機による
谷田川	八間樋	〃 420.0	〃 1.168	
	飯野揚水	〃 16.0	〃 0.116	
城沼	城沼	〃 36.0	〃 0.114	
	板倉沼	〃 18.6		
天水	計	2,011.0		

（出典：吉田彦三郎編『邑楽土地改良事業史』邑楽土地改良区、1982）

町歩を灌漑する計画であった（表 6）。

大島地先での取水は自然流入で行うが、取水口には木枠に石をつめた沈床のような堰で低水路のみを締切った。大島堰と呼ばれ、昭和 5 年（1930）に築造された。なお最下流部にあって用水は不足しないかとの疑問があるが、上流での取水は支川袋川・旗川・才川・矢場川等を通じて多量の還元となり、その落水によって安定的に取水できる状況となっている¹⁹⁾。

この県営用排水改良事業は、大正15年度から開始され、昭和 5（1930）年度完成の予定が、9 年度の完了となった。その後、戦前の昭和12～16年度にかけて県営板倉沼開墾事業が行われ、面積180町歩の板倉沼のうち53町歩が埋立てられ開田された。県営東部用排水改良事業の結果、板倉沼の水位が低下したことを背景として 4 割国庫補助、6 割の組合負担で行われたのである。さらに昭和16～20 年度の事業として、県営邑楽排水改良事業並びに仲伊谷田排水改良事業が行われ、排水路の新設とともにポンプ場（第 3 機場）が設置された。

戦後の昭和24年（1949）、土地改良法が制定され、当耕地整理組合は邑楽土地改良区に組織替となった。その前の22年 9 月、キャサリン台風により、渡良瀬遊水地堤防が本郷で決壊し、板倉は大水害に直面した。これを契機に利根川、渡良瀬川は新たな治水計画のもとに事業が進められたが、板倉でも谷田川の整備、また用排水整備を伴う土地改良事業に着手された。

まず、県営により谷田川第一排水機場（遊水地内に排水）、第二排水機場（利根川に排水）が昭和 23年、24年にそれぞれ完成した。28年には団体営かんばい事業によって大箇野排水機場が第二機場に併設されたが、昭和34年～48年度にかけて県営邑楽土地改良事業が行われた（図22）。この事業により、戦前に築造された排水機場の更新、排水幹線水路の改修が行われた。第三機場は廃止されて第一機場に整理されたが、暗梁排水のため地下水排除を行うポンプも新設され、水田の二毛作が図られた。排水路の改修としては板倉排水幹線などで行われ、海老瀬排水路が新設された。

用水についてみると、昭和39年（1964）には大島堰の下流で渡良瀬川からポンプアップで取水する頭沼用水が整備された。また43年、利根大堰から取水する邑楽用水が整備された。30年に坂東用水として利根川本川から取水していたが、利根大堰に合口されたのである。

さらに渡良瀬川沿岸水利改善促進協議会が地元関係者によって昭和39年に設立され、農業水利の

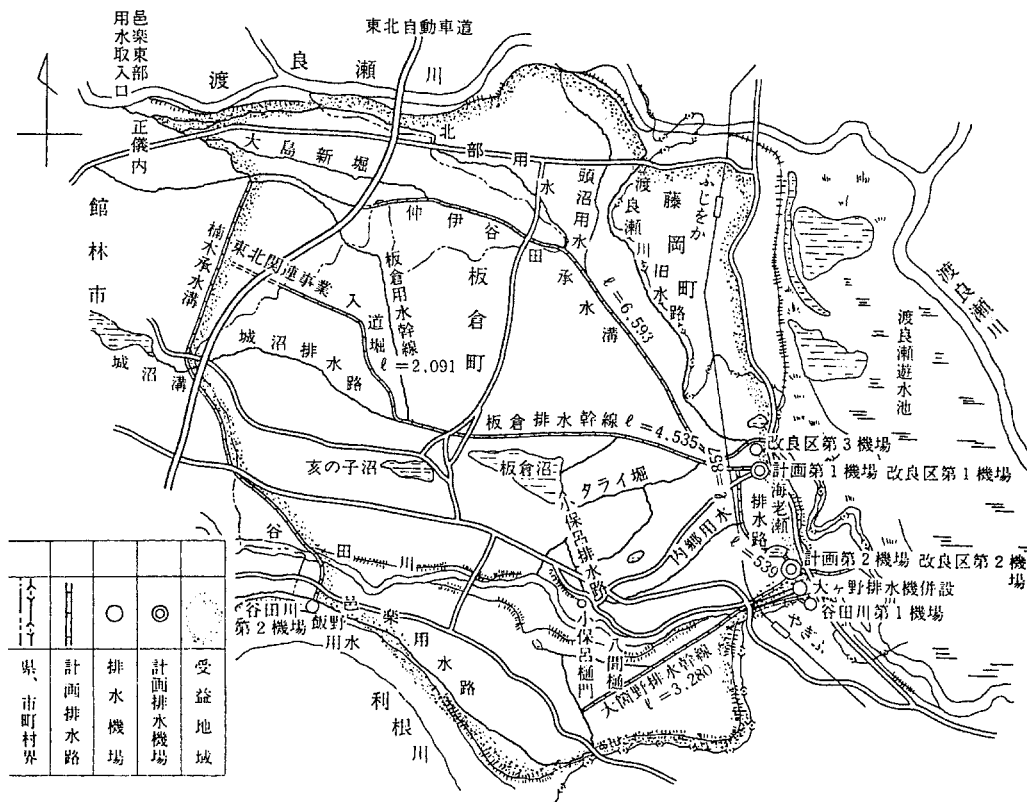


図22 県営邑楽東部土地改良事業図（出典：『邑楽土地改良事業史』前出）

表7 国営渡良瀬川沿岸農業水利事業による利水計画

かんがい面積	1,824ヘクタール	
既得	1,156ヘクタール	邑楽東部用水
新規	668ヘクタール	板倉・赤羽台地
最大取水量	6.43毎秒立法米	
既得	3.50 //	邑楽東部用水
新規	2.93 //	板倉・赤羽台地

（出典：『邑楽土地改良事業史』前出）

安全のために国営渡良瀬川沿岸農業水利事業が46～58年度にかけて行われた。この一環として大島堰を廃止し、新たに邑楽頭首工が築造された。これにより、表7にみるように、全体で灌漑面積1824 ha、最大取水量毎秒6.34m³を計画した。それまでの木工沈床等の簡易な取水施設が近代的な取水堰に生まれ変わったのである。また水源の補強として、渡良瀬川上流に草木ダムが築造された。

この後、排水施設は、建設省により昭和49年(1974)、排水能力毎秒30m³の谷田川排水機場が谷田川第二排水機場に隣接して築造された。上流部から流入してくる谷田川洪水を、利根川に一層排水することとなったのである。

また農業用排水として整備されてきた板倉川が、昭和51年(1976)、河川法の一級河川に指定され、県管理下で治水事業が進められることとなった。平成5年(1993)に着手した現在の治水目標は、30年に1回起こり得る規模の降雨を対象に、市街地は無湛水、農地は水田の湛水時間を概ね24時間以内に収めるものである。事業としては板倉川本川、海老瀬水路の整備、第二排水機場の増強、二

つの調整地の新設等を行い、ニュータウン建設の基盤となるものである。

7. 水辺再評価に向けての地域活動

先述したように、今日、群馬のウクライナとも呼ばれている板倉の農業は、利根川・渡良瀬川近代改修の下、昭和に入ってからポンプをベースにした排水事業を基盤にして成立したものである。機械動力によるポンプ排水なくして、開発・整備は行えない自然条件をもっていた。今日見られる板倉川、海老瀬水路などの河川・水路は排水事業の結果、新たに生まれたものである。明治時代と今日の状況を同時に見るならば、その景観の違いに大いに驚くだろう。最も驚くことは、広々と広がっていた板倉沼と亥の子沼が、ほとんど完全にその姿を消したことである。

亥の子沼は、昭和48年(1973)、板倉町に管理権が移されて埋め立てられ公園に整備された。その背景には、生活雑排水・土砂の流入によって環境がすっかり変わり、泥沼化したことがある。

約180町歩を有していた板倉沼は、戦前の板倉沼開墾事業として約53町歩埋め立てられたが、戦時中の昭和17年(1942)、戦時食糧増産対策として農地開発営団により50町歩が埋立・開墾された。その後さらに、ほ場整備等によって水田へと開墾されていったが、51年度から54年度にかけ、東北自動車道の開通と合わせた県企業局による工業団地造成によって完全に消失した。工業こそが地域開発の中核となるはずだとの時代背景のもと、湖沼は無用の長物として見捨てられたのである。

しかし時代は大きく転回している。「水と緑の町」を標榜する板倉町の地域づくりは、歴史風土を踏まえ「水辺の復活と創造」をキーワードとして展開すべきだと考えているが、それを目指す地域活動が板倉町では進められていた。なかでも板倉町教育委員会が熱心に啓発活動を行っている。その活動状況を見てみよう。

大きな動きは表8にみるが、水塚・揚舟・田舟・備蓄米の悉皆調査、水場に関する意識調査など、水辺に関する精力的な地域のフィールド調査を踏まえ、昭和53年(1978)から板倉町史が刊行された。「旅人の調査ではなく、自分たちの先祖が昔から受け継いできた素晴らしい文化をこの土地に生き享けている者として、点ではなく面として把え探求しよう」との意志の下、調査・執筆はほとんど地元有志の手により行われた。この間、55年には地域史の観点からまちづくりを考えようと「地域史に関するシンポジウム」が開催され、59年には板倉町史は日本地名研究所から「第3回風土賞」を受けている。

平成13年(2001)には、第16回国民文化祭が群馬県で開催されたが、板倉町は「水の文化フェスティバル」をテーマに参画し、揚舟ツアー、水車体験、漁法の実演、川の写真展等が行われた。14年度から始まった板倉講座は今日まで行われ、17年度までは歴史・文化・自然をテーマに毎年5名の講師による講演(表9)、18年度は民俗調査、19年度は文化的景観調査の報告会が行われ、多くの町民が参加した。

また写真展を中心とした「水の文化史展」が平成6年から行われ、水をテーマにおいたシンポジウムも「足尾鉍毒問題と板倉の人々―失われていく環境の再生を求めて」(平成12年2月13日)、「水

表 8 行政による水場の文化の見直し取り組み

年	で き ごと
昭和35（1960）年	板倉町民俗調査を実施（群馬県下において3番目）
昭和45（1970）年	町史編纂室の発足
昭和53（1978）年	板倉町史の発刊（1978～1989年） 「水塚・揚舟・田舟・備蓄米の悉皆調査」、「水場に関する意識調査」などを実施
昭和59（1984）年	板倉町史が日本地名研究所から「第3回風土賞」を受賞
平成6（1994）年	第1回「水文化史展」開催
平成7（1995）年	文化財調査研究誌『波動』Vol.1 及び文化財広報誌『波紋』Vol.1の発刊
平成13（2001）年	国民文化祭「水と文化フェスティバル」開催
平成13（2001）年	文化財資料館開館
平成15（2003）年	第1回「板倉学講座」開催
平成16（2004）年	群馬県と板倉町共同プロジェクト「水郷いたくら 水文化のある風景活用プロジェクト」を組織
平成16（2004）年	ふるさと文化再興事業
平成18（2006）年	板倉の「水郷景観保存計画策定委員会」を組織

表 9 板倉学講座の内容（平成15年度～平成17年度）

平成15（2003）年度	平成16（2004）年度	平成17（2005）年度
「雷電神社の建築について」 （村田敬一氏）	「水塚・水屋・段蔵—日本各地の水防建築—」 （伊藤安男氏）	「利根川の水運と高瀬舟」 （川名 登氏）
「利根川の流路変遷と水害」 （大熊 孝氏）	「渡良瀬川の河道変遷」 （澤口 宏氏）	「雷電神社所蔵『高瀬舟の絵馬』から見える利根川水運」 （島田 洋氏）
「除川村の古絵図を読み解く」 （築瀬大輔氏）	「土面となかま」（小野美代子氏）	「スミツカリのルーツを追って—平安時代の近江国から板倉まで」 （松本忠久氏）
「地域対立から見た渡良瀬遊水地の成立」 （松浦茂樹氏）	「文化財保護法の改正と文化的景観」 （本中 眞氏）	「板倉の水塚 課題と提案」 （加藤誠洋氏）
「板倉の風土と環境のうつりかわり—縄文海進から現代まで—」 （辻誠一郎氏）	「アンバ大杉の信仰」 （大島建彦氏）	「利根川中流部の排水機—自然排水からポンプによる強制排水へ—」 （熊倉一見氏）

（出典：板倉町教育委員会『群馬県板倉町水場の文化的景観調査報告書 2008年』）

文化を生かした町づくり—先人の知恵から防災を考える」（平成12年11月23日）、「水文化を生かした町づくり—21世紀川とともに暮らす」（平成13年）が開催されている。

さらに平成14年から「水場の知恵袋」と称し、「揚舟講座」・「水場の語り部」が行われた。「揚舟講座」は、14年は一般公募で中学生と大人が参加したが、翌年からは小学生を対象としている。また「水場の語り部」は、カスリーン台風の経験者に水害の話をしてもらう試みである。そして平成16年度から「ふるさと文化再興事業」として揚舟・田舟・高瀬舟の制作技術及び漕法の記録保存、川田の耕作技術、伝統的淡水漁法、ヨシヅ編み、綿栽培と綿織物の技術の伝承と記録保存が行われた。

平成16、17年度には群馬県・板倉町共同プロジェクト「水郷いたくら 水文化のある風景プロジェクト」が行われ、水文化のある風景を活用した地域づくりが提案され、「町まると博物館『水塚・

谷田川景観エリア 水の博物館』が構想された。

このような教育委員会を中心とした熱心な活動を背景に、平成18年度「板倉の水郷景観保存計画策定委員会」が組織され、水と人々の歴史的関わりを基礎におく地域づくりが具体化していったのである。

8. 新たな水管理と今後の方向

8.1 水辺の復活と地域用水

利水の面から当地域に大きな影響を与えた国営渡良瀬川沿岸水利事業は、昭和58年（1983）に完成したのであるが、その後の社会経済の変貌は甚だしい。農地のかなりが、宅地・工場・商業施設へと変貌していった。また環境問題が一層、前面に出てきて、豊かでうるおいのある身近な生活空間の創出が求められていった。当然、新たな水管理はこれらの要求を満たすよう配慮すべきであろう。これまでの生産のための利水（農業用水、鉱工業用水、発電用水）、生活するための利水（水道用水、発電用水）に加えて、生活にうるおいを与える水利用、つまり環境用水の整備が大きな課題となっている。板倉町でも先進的な取り組みが行われているが、それについてみよう。

板倉町谷田川への観光放流

谷田川は、館林市所轄沼から流出する鶴生田川の末流で、利根川と渡良瀬川にはさまれた低湿地を流れている。流路はおよそ22kmであるが、その間の標高差はわずかに5～6 mに過ぎない典型的な平地河川である。かつては、ナマズ、ドジョウ、ウナギなどの川魚漁が盛んで、川には漁師の舟がいくつも並んでいたという。この谷田川で、平成13年（2001）度に国民文化祭の一環として揚舟ツアーが行われたが、大変好評だったため、翌年から観光事業として実施されている（写真3）。開始後3年間は県から補助が出ていたため無料であったが、現在では乗船料として500円（小学生以下は無料）取るようになっている。



写真3 揚舟ツアー

揚舟は、かつて水害常習地帯であった板倉町で、湛水に備えて準備されていたものである。その揚舟を観光手段に利用したのである。コースは、群馬の水郷公園船着場から八間樋頭首工までの区間で、1日6便運行され約40分間周遊する（図23）。

平成18年（2006）度は、4、5、6、9、10月に45日運行し2,710人の観光客が訪れた。ここで注目すべきことは谷田川の水量確保の方法である。ツアーが行われる4月～10月の間は八間樋頭首工を締切って水位を上げているが、自然状況のままでは水質が悪いためレクリエーションを楽しむ場とし

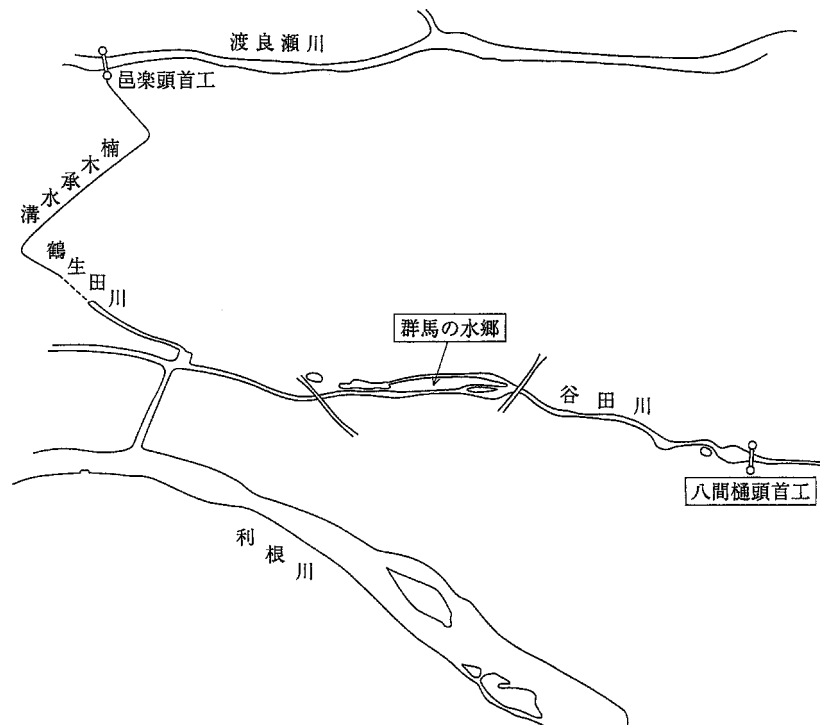


図23 渡良瀬川・谷田川の関係概況（作成 滝沢花織）

ては都合が悪い。そこで重要な役割を果たしたのが、邑楽頭首工からの導水である。灌漑期に毎秒0.9m³ほど楠木承水溝を通して谷田川支川・鶴生田川に流下させ、結果的に浄化用水の役割を果たしている。実質的に観光放流となっていると考えてよいが、水源施設としてその水利権は、草木ダム建設により手に入れた板倉・赤羽の特定水利権毎秒2.93m³の一部を利用している²⁰⁾。水利権者は、板倉台地土地改良区（理事長・板倉町長、水利権量毎秒1.14m³）、赤里台地土地改良区（理事長・館林市長、水利権量毎秒1.79m³）で、水利権確保のための草木ダム等の建設費、また年々の管理費は板倉町、館林市の行政経費から支払われている。

この特定水利権は、板倉町の板倉台地、館林市の赤里台地の畑地灌漑を目的としたものであったが、畑地開発はその後、行われていない。この水利権が、谷田川の浄化用水や揚舟ツアーに有効に利用されているのである。農業用水として確保したものが、実質的に地域用水となっているのであるが、その水利費は行政経費の中から支払われている。この実状をふまえ、さらに積極的に地域用水として位置づけていくべきと考える。

なお揚舟ツアーは八間樋頭首工の締切りによって水位が確保されているが、9月16日以降は非灌漑期であるため、本来は締切った堰をはずさねばならない。しかし板倉町の要請で邑楽土地改良区が全面的に協力して堰の締切りを行い揚舟ツアーの実施が可能となっている。

8.2 雷電神社の再生

板倉の歴史的財産である雷電神社本宮を大事にしたい。先述したように、分社は群馬県・埼玉県・栃木県を中心に西関東に広く分布している本宮であり、中世には広い地域の一つの文化圏の中心地

であったという輝かしい歴史を持っている。しかし荘厳な境内をつくり出すのに重要な役割を担った板倉沼、亥の子沼が消失した現在、雷電神社はそれこそ「陸に上がったカッパ」のように見受けられる。水辺にあつての雷電神社である。神社の最も大事なものがもぎ取られたように思われ、何とも言えぬ寂しさを感じる。その周辺に再度、水辺の復活を図りたいが、さらに龍・大蛇を中心とした整備を進めていったらどうかと考えている。このことについて述べていく。

雷電神社と龍・大蛇伝説

板倉沼・亥の子沼を背景にした雷電神社であるので、数々の龍・大蛇伝説を持つ。たとえば、貞永元年(1232)、親鸞の高弟であった性信上人により、板倉沼にいた大蛇が退治されたことが伝わっている。また龍を描いた196×66cmの立派な掛け軸が神社にあるが、33年に一度の御開帳のときに本社に掛けられる。その龍の目に光があたると雷雲が生じると言われており、御開帳の時には布で目を覆って人々の前に出される。昭和27年(1952)の御開帳の時、覆わずに掛けたところ、雷雲が発生し、慌てて白紙を張ったという。

それ以外、旧6月の夏越し祭の時に作った茅の輪は、龍として利根川に流されていた。また本社には堂々とした「八岐大蛇」、2体の「応龍」の彫り物、さらに多くの龍が彫られ、合わせて22体の龍が見事に本社を飾っている。これらは、天保6年(1835)の造営の祭、名人・石原常八(左甚五郎から10代目)によって彫られたものである。壮麗な本社とも合わせ、最盛期にあった利根川舟運の関係者からの寄進がいかに大きかったことをうかがわせる。

なお上野国神名帳には大雷明神とあるが、この地域は雷の多いところで、しばしば雷が板倉沼に落ちていた。雷鳴とともに現れる稲妻は、時には嵐を伴う激しい雨をもたらす。龍の起源は雷との説があるように、古くより龍と雷は深く結びつき一体のものと考えられていた。春から秋にかけての稲妻は、金龍の昇天、秋の稲妻は天より下る龍とされていた。

さて本神社と関わりを持つ雨乞い神事として興味深いものに、脚折(すねおり)雨乞がある。これについて、少し詳しくみてみよう。

脚折(すねおり)雨乞と雷電神社

埼玉県鶴ヶ島市脚折地区に雷電池があり、この池の周りに雷電社がある。この池を中心に、4年に1回、約36mの長さの竜蛇による雄壮な雨乞行事が行われる。この竜蛇は、竹と麦わらを材料にして地域の人々によって作られるが、現在、国選択無形文化財になっていて、地域の重要なイベントとなっている。この行事に重要な役割を担っているのが、板倉の雷電神社本宮から運ばれてくる御神水である。前日、本宮に出かけもらって帰るのであるが、今は公園の一部にしか残っていない以前の亥の子沼から宮司が水を取り、御祓いして御神水となるのである(写真4)。それを雷電池に注いで効験あらかたにする(写真5)。

鶴ヶ島市脚折の元々の雷電池は今に比べてずっと大きかったが、寛永年間(1624～44)にその大部分を埋めてしまった。このためそこに棲んでいた大蛇は、板倉雷電神社の池に移ってしまったと



写真4 宮司による御神水の取水（撮影 鏑山英次）



写真5 雷電池に御神水を注ぐ（撮影 鏑山英次）

伝えられている。

当日、竜蛇は約300人の人々にかつがれ、白髭神社を出て法螺貝・太鼓の音とともに約2km行進し、雷電池に着く。この後、「雨降れたんじゃく、ここへかかれ黒雲」と叫びながら、人々は池の中を周回し、やがて竜蛇の身体は壊れていく。龍神を怒らせて降雨をもたらそうというのである（写真6）。



写真6 雷電池に入った竜蛇（撮影 鏑山英次）

以前は日照りで灌漑用水に難渋したとき、降雨を祈願して行われる真剣な行事であった。明治7年（1874）から昭和39年（1964）の間に10回行われたと記録されている。当時、板倉雷電神社に出向き御神水をもらいにいった代表者は、水をもらったら一目散に脚折まで帰らねばならなかった。立ち止まったら、その地で雨が降ると信じられているためである。

このように龍・大蛇に関連した伝説を持っている雷電神社なので、世界に通じる龍・蛇の資料館を設置し、観光資源として活用していくことを提案する。

9. おわりに

東洋大学国際地域部が位置するのが、群馬県板倉町である。ここは、利根川と渡良瀬川に囲まれ、その一部は渡良瀬遊水地となっている。この渡良瀬遊水地の成立は、日本最初の近代公害と知られる足尾鉍毒事件と深いつながりをもつ。また利根川と渡良瀬川の合流点下流は旧赤堀川であるが、この赤堀川こそ利根川東遷の主舞台である。利根川東遷とは、それまで江戸（東京）湾に流出していた利根川を銚子から太平洋に流出させた事業である。この事業について、現在も多くの研究者により研究が進められている。河川研究者にとって、当地域はまことに魅力ある地域であるが、複雑な地形・地質、また歴史から、理解するには日本で最も難しい地域と断言してよからう。

さてこの地に赴任したからには、これらの問題を研究テーマにせざるを得ないと、筆者が覚悟を決めてからあつと言う間に10年がたった。新たな資料の発掘もあり、まだ途上であるが、ある程度の研究成果も得たと考えている。

足尾鉍毒問題の研究を進めるにあたり、最初のきっかけは2000年2月13日に板倉町で行われたシンポジウム「足尾鉍毒問題と板倉の人々―失われていく環境の再生を求めて」であった。講演者たちの話は、足尾鉍毒問題と裏腹な関係にある渡良瀬川治水、さらに利根川治水のことがほとんど触れられていなかった、あるいは河川研究者からみたら、その理解は全く不十分であった。その後、資料収集から研究を開始したが、その中に『板倉町史』があり、その質の高さに驚いた。やがて板倉町教育委員会宮田裕紀枝さんと知り合い、教育委員会を中心とした文化活動を知った。そして機関誌『波動』への執筆、板倉講座における講師など、教育委員会のいくつかの活動に参加することとなった。また宮田さんには、大学の講義の中で地元のことを話していただいた。

その後、2004、05年度、群馬県・板倉町によって行われた「水郷いたくら 水文化のある風景プロジェクト」には委員長として、06年度から08年度にかけて板倉町によって行われた「板倉の水郷景観保存計画等委員会」には副委員長として参画し、地域の方々から多くの知識・情報を得た。また原稿執筆も依頼され、水を中心とした板倉町の歴史、板倉町と利根川・渡良瀬川の関わりなどさらに調べていった。

東洋大学国際地域学部は、2009年3月には板倉町を去ることとなっている。ここに、約10年にわたり板倉町さらに当地域でお世話になったせめてものお返しとして、「板倉町と水辺」のテーマのもとに調査・研究してきたことを整理した次第である。

注

- 1) 板倉町史編さん委員会『板倉町史 近世史料集 別巻六』 1981年 pp.189～191
- 2) 『板倉町史 近世史料集 別巻六』 前出 193～196
- 3) 澤口宏「渡良瀬川下流沖積低地における地形と水害」『群馬大学地理学論文集第12巻』1984年
- 4) 内山俊身「戦国期古河公方周辺の流通に関わる人々」『茨城県立歴史館報29』茨城県立歴史館 2002年
- 5) 『群馬県邑楽郡誌』 群馬県邑楽郡教育会1917年 pp.17～18
- 6) 同上
- 7) 板倉町教育委員会『利根川・渡良瀬川流域の「水場」景観保存計画』p.44
- 8) 『小室家文書』(埼玉県北川辺町)によると「天保一二年間ノ川メ切」と明記されている。また『鷹見泉石日記』からこう判断して間違いないと考えている。
- 9) 大谷貞夫は、『懷中諸用之覚書』(関宿町会田家文書)に基づき、享保14年(1729)を棒出し設置の出発点としている。(大谷貞夫「近世における関宿周辺の治水事情」『房総の近世Ⅰ』財団法人千葉県史料研究団体、2002年
- 10) 「明治十年十二月 下野南部治水会日誌」『藤岡町史資料編谷中村』藤岡町史編さん委員会 2001年 pp.199～209
- 11) 羽生領用悪水路土地改良区『羽生領水利史 通史編』pp.346～347
- 12) 前掲書 5)

- 13) 板倉町教育委員会『波動 Vol.8』2004年 pp.11～19
- 14) 『群馬県邑楽郡史』前出、1917年 pp.724～725
- 15) 「明治四年八月 渡良瀬川水行嘆願書」『藤岡町史資料編 近世』藤岡町史編さん委員会 2000年 p.103
- 16) 「明治32年12月谷中村堤防拡築工事村債寄付陳情書」『藤岡町史 資料編谷中村』藤岡町2001年 pp.239～240
- 17) 佐江衆一「谷中村堤防破壊事件法廷資料」『田中正造と足尾鉾毒事件研究 4』渡良瀬川研究会編 1981年 pp.149～159
- 18) 旧7村のうち現在、板倉町となっているのは、西谷田、海老瀬、大箇野、伊奈良である。
- 19) 新沢嘉芽統監修『水利の開発と調整上巻』時潮社、1978年 pp.528～529
- 20) 邑楽土地改良区によると、毎秒0.9 m³のうち毎秒0.48m³（不特定水利）、毎秒0.42m³（特定用水）と整理している。

主要参考文献

- ・『群馬県邑楽郡誌』 群馬県邑楽郡教育会1917年
- ・『板倉町周辺低湿地の治水と利水…水場の生活と知恵』板倉町史編さん委員会1980年
- ・吉田彦三郎編『邑楽土地改良区事業史』邑楽土地改良区 1982年
- ・『板倉町史別巻四』板倉町史編さん委員会 1980年
- ・『板倉町史通史上巻』板倉町史編さん委員会 1985年
- ・『板倉町史通史下巻』板倉町史編さん委員会 1985年
- ・『板倉町とカスリーン台風』板倉町教育委員会 1998年
- ・『水防建築「水塚」調査報告書』板倉町教育委員会 2004年
- ・新沢嘉芽統監修『水利の開発と調整上巻』時潮社、1978年
- ・澤口宏「渡良瀬川下流沖積低地における地形と水害」『群馬大学地理学論文集第12巻』1984年
- ・『利根水系農業水利誌』社団法人農業土木学会、1987年
- ・『渡良瀬遊水地成立史』国土交通省利根川河川事務所 2006年
- ・『利根川・渡良瀬川流域の「水場」景観保存計画』板倉町教育委員会、2008年

The Development of ITAKURA Town and the Waterfront

Shigeki MATSUURA

ITAKURA Town in Gunma Prefecture is surrounded by TONE River and WATARASE River. The Town has developed based on the strong relations with river, pond and so on. The Town was attacked by the flood once in 3 years before. Therefore the struggle against the flood damage was the history of the Town. Also the historic landscape of the Town was the riverside district which had ITAKURA Pond, INOKO Pond in the central part and YATA River and so on. RAIDENN Shrine which was the symbolical building in the Town was situated near ITAKURA Pond and INOKO Pond.

After the flood control works in TONE River and WATARASE River was over in the modern times, the flood damage did not almost occurred in the Town. The most recent flood damage occurred in 1947. ITAKURA Pond and INOKO Pond were changed into the tillage, the industrial site and the park by the development. As the result the waterside space decreased remarkably. Also a drainage system by the pump was serviced and city land use is being done.

In today, the symbiosis with the nature is recognized to be important generally and the reevaluation of the Waterfront is proceeded with. ITAKURA Town is recognizing the historic landscape as the cultured landscape and places the historic landscape in the basics of the regional development.

Key words : Cultured landscape, WATARASE River, The symbiosis with the nature